



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	冊子全体
Citation	第19回JINSHA 情報共有会 : 「社会的インパクト」を「評価学」の視点から考える, 1-96
Issue Date	2025-03-31
DOI	https://doi.org/10.14943/JINSHA-19.0
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94740
Type	conference proceedings
File Information	all.pdf





第19回
JINSHA 情報共有会

「社会的インパクト」を
「評価学」の視点から考える

北海道大学
統合URA本部



第19回
JINSHA 情報共有会

「社会的インパクト」を
「評価学」の視点から考える

北海道大学
統合URA本部

目 次

第1部 講演

趣旨説明	1
------------	---

北海道大学 統合 URA 本部・主任 URA

中野 悦子

評価と社会的インパクト ～評価学の視点から～	11
------------------------------	----

明治大学 公共政策大学院 ガバナンス研究科・教授

源 由理子

大学における社会的インパクト評価と評価学的アプローチの接続	39
-------------------------------------	----

国文学研究資料館 研究部・特任准教授

押海 圭一

質疑応答～フロアからの質問	69
---------------------	----

第2部 ワークショップ

研究の社会的インパクトとはどういうものか～事例から学ぶ

開催報告	77
------------	----

登壇者プロフィール	93
-----------------	----

趣旨説明

北海道大学 統合 URA 本部・主任 URA 中野 悦子

本日のテーマは、イベント案内のチラシに書かせていただきましたとおり、研究評価からは距離のある「評価学」の視点から「社会的インパクト」について学び、改めて研究が創出する社会的インパクトとは何かを考える契機とする、といたしました。これだけ聞くとあまりよくわからないと思いますが、私たち URA の問題意識から申し上げますと、三つの背景を挙げることができます。一つ目は大学評価、二つ目が研究評価、三つ目が社会的インパクト評価です。

まず大学評価について、これは、私自身も含めた国立大学に所属する URA が、今、非常にドキドキしているところだと思います。第四期中期目標期間の運営費交付金に新しく「ミッション実現戦略分」という予算が導入され、その予算配分に社会的インパクトを指標とした評価が用いられることになりました。ここで特徴的なのが、各大学のミッションを踏まえた強みや特色から創出された社会的インパクトが評価されるという点です。ご存知の方が多いと思いますが、イギリスでは、Research Excellence Framework (REF) が、研究評価の枠組みとして使われています。今回の運営費交付金の評価指標は、その REF の社会的インパクト評価の部分を参考にする、となっています。REF はあくまで研究評価のフレームワークですが、それを大学全体の、それも大学のミッションとつながりのある社会的インパクトを評価する際の指標にすることとなりました。私たち URA にとっては、「お金」に関わる話はいろいろと上から指示が来ることになり、上司からはとにかく社会的インパクトを調べろ、と言われたりして「社会的インパクト」というキーワードの使用が日常的に上昇している方も多いのではないかと思います。

次に研究評価です。後で説明いたしますが、JINSHA 情報共有会の実施体となっている「人文・社会科学系 URA ネットワーク」では、京都大学の人社系 URA を中心に、人文・社会科学における研究評価について、非常に長く取り

組んでいます。2018年に象徴的なイベントとして、「人文・社会科学系研究の未来像を描く—研究の発展につながる評価とは—」というタイトルでフォーラムが開催されました¹。これ以降、いわゆる論文指標に偏重気味な日本の大学の研究評価体制に対して、人文・社会科学の研究成果をどのように考えていくのか、さらに「責任ある研究評価」(RRA)の文脈で日本の研究評価をどう考えるのかなどについて、いろいろな取り組みや議論の蓄積があります。その中で人社系研究が創出する社会的インパクトについても以前から議論になっています。

ここまではアカデミアのことですが、その一方で、最近ニュースなどでも日常的にインパクト投資や社会的インパクト投資など、投資との関係で「社会的インパクト」という言葉がよく聞かれるようになっていきます。この文脈では、2016年の内閣府「社会的インパクト評価検討ワーキング・グループ」が発表した定義がよく引用されています²。ここからでもすでに10年近く経っていますが、ここで言われている定義と今求められている社会的インパクトが関係しているのかいないのかわからないままにコミュニケーションがなされているように感じています。ちょっと文系っぽい表現で言いますと、相手がどういう意味内容でその言葉を使っているのかわからないため、なかなかコミュニケーションがかみ合わないような背景があるということです。

URAからの問題提起として、このような三つの背景をご説明いたしました。最初の二つはどちらかというとURAとしての直接的な課題ですが、三つ目の視点を入れることによって、もう一度、自分たちが今までやってきたところを捉えなおし、そもそも社会的インパクトとは何なのかを検討してみたいという、そういう思いで今回の情報共有会を企画させていただきました。

¹ 京都大学 学術研究支援室 『人文・社会科学系研究の未来像を描く—研究の発展につながる評価とは—』(第4回 人文・社会科学系研究推進フォーラム 報告書)、2018年9月。

<https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/236470>

² 社会的インパクト評価検討ワーキング・グループ「社会的インパクト評価の推進に向けて—社会的課題解決に向けた社会的インパクト評価の基本的概念と今後の対応策について—」(2016年3月)

<https://www.npo-homepage.go.jp/uploads/social-impact-hyouka-houkoku.pdf>

今回は二つの講演をお願いしております。一つ目は、明治大学公共政策大学院の源由理子先生に「評価と社会的インパクト～評価学の視点から」というタイトルでご講演いただきます。二つ目は「大学における社会的インパクト評価と評価学のアプローチの接続」というテーマで、国文学研究資料館の押海圭一先生にご講演いただきます。まず源先生のご講演から、評価学での社会的インパクトの考え方を学び、次にその考え方が、今までの私たちの試みとどういう接点があるのかについて、押海先生にお話ししていただく、という建て付けになっております。その後に、会場にお集まりの皆様と一緒に、「研究の社会的インパクトとはどういうものか」という、そもそものところに立ち戻って、ワークショップを行います。

最後に JINSHA 情報共有会の実施体となっている人文・社会科学系 URA ネットワークについて簡単に紹介させていただきます³。人社系 URA は、今は少し増えてきましたが、研究大学強化促進事業が始まった頃は、各大学に一人いるかないかの状態でした。一人で仕事をしていることが多かったため、横のつながりを広げて協働し、いろいろな課題を解決していくための緩やかなつながりとして、このネットワークが発足されました。今年で立ち上げから 10 年経ち、幹事校として運営に参加している機関が 13 大学となりました。それ以外にも、所属機関は幹事校ではないが、企画と一緒に検討してくださったり、フォーラムには毎回来てくださったりして連携している方々が大勢いらっしゃって、非常に大きなつながりができていると思っております。この 10 年の間に、フォーラムを年に 1 回と、情報共有会という小規模の勉強会を開催し、今回がその第 19 回目となります。

沖縄科学技術大学院大学（OIST）で開催される RA 協議会 2024 年度年次大会では、人社系 URA ネットワーク 10 年の軌跡と展望というテーマでポスター発表をさせていただきます⁴。沖縄に行かれる方は是非お立ち寄りください。また、2024 年度の人社系研究推進フォーラムは、神戸大学と新潟大学が

³ 人文・社会科学系 URA ネットワークの活動については、<https://www.ura.adm.u-tokyo.ac.jp/services/view/d6a8cef1-22f8-4c00-b080-c28fc4cf6c75> 参照のこと。

ダブル主催で企画し、「人社系研究の社会貢献」というテーマで神戸大学で開催する予定になっています⁵。是非ご参加いただけたら大変嬉しく思います。

⁴ 川人よし恵、新澤裕子、他「機関をこえた URA 連携の意義とは～人社系 URA ネットワーク 10 年の軌跡と展望」RA 協議会 第 10 回年次大会（2024 年 10 月 16-17 日）、ポスター発表（優秀賞）。<https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/records/2010385>

⁵ 第 10 回人文・社会科学系研究推進フォーラム「人社系研究はどう産業に貢献し得るのか ―“シンダイ”の実践から紐解く―」開催案内：
<https://www.ura.niigata-u.ac.jp/2025/02/13/6371/>

第19回 JINSHA 情報共有会 @北海道大学

JINSHA

URA

北海道大学
統合URA本部

「社会的インパクト」を 「評価学」の視点から考える

趣旨説明

2024年10月9日（水）

主 催：北海道大学 統合URA本部

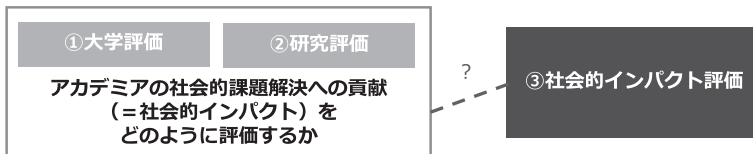
共 催：大阪大学 経営企画オフィスURA部門、京都大学 学術研究展開センター、筑波大学 研究戦略イニシアティブ推進機構
研究マネジメント室、琉球大学 研究推進機構研究企画室、早稲田大学 研究戦略センター、横浜国立大学 研究推進
機構、中央大学 研究推進支援本部、広島大学 未来共創科学研究本部研究戦略部研究戦略推進部門、東北大学
研究推進・支援機構リサーチ・マネジメントセンター、東京大学 リサーチ・アドミニストレーター推進室、新潟大学 経営戦略
本部UA室、神戸大学 学術研究推進機構学術研究推進室

1

本日のテーマ

研究評価からは距離のある「評価学」の視点から
「社会的インパクト」について学び、
改めて研究が創出する社会的インパクトとは何かを
議論する契機とする

【3つの背景／URAからの問題意識】



2

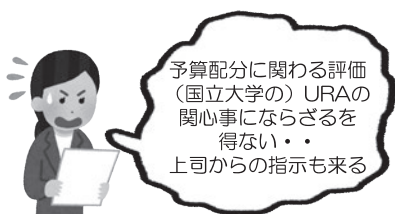
背景① 大学評価：国立大学法人第4期運営費交付金配分

「我が国最大の知的インフラである国立大学が、我が国社会の公共財として、学術的な価値だけでなく、社会、経済、国民生活等の進歩にどれだけ影響を与えることができるかということを国民・社会に説明して理解を得ていく必要があります。各大学が社会的なインパクトを創出するために効果的な取組を分析し、その戦略的な強化に取り組むことを後押しする仕組みとして「ミッション実現戦略分」を導入した。」

(国立大学法人運営費交付金「ミッション実現戦略分」の評価について(骨子)概要部分から引用)

・各大学が自身のミッションを踏まえた、強み・特色ある分野を中心に創出された社会的インパクトを評価し、予算配分に反映

・イギリスのREF (Research Excellence Framework) を参考に評価方法が検討
研究以外が基となる社会的インパクトの指標をどうするのかは例示がまだ



・文科省の資料には「社会的インパクトの「社会」をどの範囲と定めるかについては、各大学がそれぞれのミッションに基づきその適切性を説明する必要がある」とある一方で、評価体制や評価を順位付けするための枠(グルーピングなど)は今後の検討となっている

3

背景② 研究評価：人文学・社会科学の研究評価の検討

・人社系URAを中心とした人社系研究評価の検討、多様な評価指標の可能性

・論文指標偏重の弊害の警鐘と責任ある研究評価

・人文・社会科学系研究の社会的インパクト評価についての検討開始

(日本学術会議 科学者委員会 研究評価分科会での報告、令和5(2023)年9月)

・RESSHでの取組発表

Yu Sasaki, Yuko Shinzawa, Futaba Fujikawa, Keiichi Oshiumi and Kanako Hirasawa, "Putting Our Platform to Work: Debating Responsible Research Assessment and 'Societal Impact' in the Japanese University System" RESSH2024, Galway, 24 MAY 2024



4

背景③ 大学の社会課題解決への貢献・・・社会的インパクト評価？

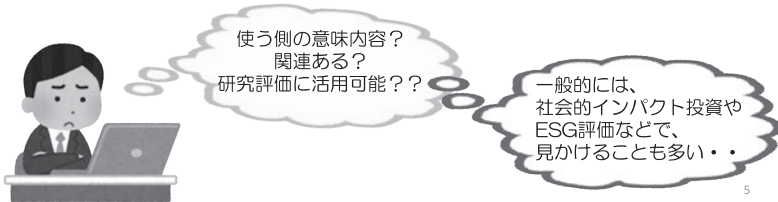
内閣府・社会的インパクト評価検討ワーキング・グループの定義 (2016)

<https://www.npo-homepage.go.jp/uploads/social-impact-hyouka-houkoku.pdf>

「社会的インパクト」：短期、長期の変化を含め、当該事業や活動の結果として生じた社会的、環境的なアウトカム

「社会的インパクト評価」：社会的インパクトを定量的・定性的に把握し、当該事業や活動について価値判断を加えること

※「評価」は「監査」・「査定」ではなく、「価値を引き出す」こと
評価を実施し、活用することで、組織の成長や事業の改善等様々なメリット

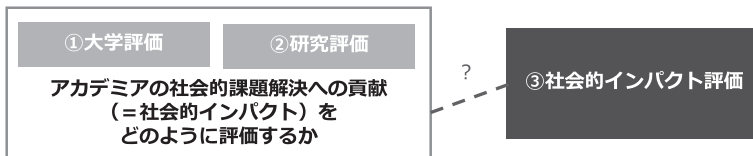


5

本日のテーマ（再掲）

研究評価からは距離のある「**評価学**」の視点から
「**社会的インパクト**」について学び、
改めて**研究が創出する社会的インパクトとは何か**を
議論する契機とする

【3つの背景／URAからの問題意識】



6

第1部 講演



「評価と社会的インパクト～評価学の視点から」

源 由理子 氏（明治大学 公共政策大学院 ガバナンス研究科・教授）

（略歴）国際基督教大学卒。アメリカ国際経営大学院修士課程修了（MIM）。東京工業大学大学院社会理工学研究科博士後期課程（人間行動システム専攻）修了、博士（学術）。国際協力事業団（現国際協力機構、JICA）等を経て現職。これまでJICA・世界銀行・自治体・NPO/NGO等における評価システム構築・手法開発の研究・実践に携わる。文科省、厚労省、総務省、文化庁、自治体等の評価関連委員、研修講師等を歴任。日本民間公益活動連携機構専門家会議委員、JICA有識者評価委員会委員、一般財団法人社会的インパクト・マネジメント・イニシアティブ（SIMI）評議員。日本評価学会副会長。専門は評価論、社会開発論。



「大学における社会的インパクト評価と 評価学的アプローチの接続」

押海 圭一 氏（国文学研究資料館 研究部・特任准教授）

（略歴）早稲田大学文学部卒。京都大学法科大学院修了（法務博士）。政策研究大学院博士後期課程在学中、研究テーマは「人文系研究評価」。2011年より、総合地球環境学研究所特任専門職員（IR担当）、琉球大学主任リサーチ・アドミニストレーター（研究費獲得支援、研究プロジェクトマネジメント、研究IRなどを担当）、人間文化研究機構本部機構長室 特任助教（評価・IR担当）を経て、現職。現在は研究部に所属し、館のIR実務および人文・社会系研究評価研究を実施中。

7

第2部 ワークショップ

<テーマ> 研究の社会的インパクトとはどういうものか～事例から学ぶ

<目的>

そもそも**社会的インパクトとはどういうもので、研究が社会的インパクトを生み出すとはどういうことなのか**をテーマとして絞り込むことで、まず研究が生み出す社会的インパクトを **社会の一員である自分と関係のあるもの**として考えてみることからスタートし、その後、評価の理由、評価方法などについて、第1部とも接続しながら議論し、理解を深めていく。

<方法>

参加者が事前に事例を検討。その事例を持ち寄って、**互いの考える「研究が創出する社会的インパクト」を共有し、その特徴や面白さ、創出のされ方の多用性についてディスカッション**

第19回JINSHA情報共有会 企画立案・協力（講演・ワークショップ）

人社系URAネットワーク：中野悦子（北海道大学）、佐々木結（京都大学）

川人よし恵（大阪教育大学／大阪大学）、新澤裕子（東京大学）

押海圭一（国文学研究資料館）、荒木裕子（広島大学）

森本行人（筑波大学）、山田綾子（大阪大学）、藤川二葉（京都大学）

稲石奈津子（京都大学）

8

人文・社会科学系URAネットワークとは

▶ネットワーク形成の主な動機



職場に人社系URAは自分
だけ（仲間求め）



情報交換や相互研鑽した
い



自分だけではできない活
動を展開したい

▶ネットワークに基づく活動の基本方針

- ・お互いの関係はフラット
- ・アイデアや人的リソース、活動資金は持ち寄りで（所属組織の理解を得ることが重要）

9

人文・社会科学系URAネットワークとは

人文・社会科学系研究推進フォーラム（人社系フォーラム、2014年発足）を連携して開催している幹事校・13大学のURAのゆるやかなつながり。イベント開催や情報共有等の活動基盤として機能している。

- ネットワークメンバーは以下13大学に所属するURA（2024年9月現在）
 - ・大阪大学 経営企画オフィスURA部門
 - ・京都大学 学術研究展開センター
 - ・筑波大学 研究戦略イニシアティブ推進機構 研究マネジメント室
 - ・琉球大学 研究推進機構研究企画室
 - ・早稲田大学 研究戦略センター
 - ・北海道大学 統合URA本部
 - ・横浜国立大学 研究推進機構
 - ・中央大学 研究推進支援本部
 - ・広島大学 未来共創科学研究本部 研究戦略部 研究戦略推進部門
 - ・東北大学 研究推進・支援機構リサーチ・マネジメントセンター
 - ・東京大学 リサーチ・アドミニストレーター推進室
 - ・新潟大学 経営戦略本部UA室
 - ・神戸大学 学術研究推進機構 学術研究推進室

10

人文・社会科学系フォーラム

<https://www.ura.adm.u-tokyo.ac.jp/services/view/d6a8cef1-22f8-4c00-b080-c28fc4cf6c75>

第1回（2014年12月、大阪大学）

「人文・社会科学系研究推進に必要な共通基盤整備を考えよう」

第2回（2016年3月、筑波大学）

「人文・社会科学系研究推進の三手先を考える」

第3回（2017年3月、琉球大学）

「地域社会が抱える社会課題の解決や新たな価値創造」

第4回（2018年3月、京都大学）

「人文・社会科学系研究の未来像を描く
— 研究の発展につながる評価とは —

第5回（2019年3月、早稲田大学）

「人文・社会科学系研究を振興するファンドとその支援」

第6回（2020年10月、北海道大学）「人社主導の学際研究プロジェクト創出を目指して」

第7回（2022年3月、中央大学）「人文・社会科学系研究が創造するイノベーション」

第8回（2023年3月、広島大学）「ELSI（倫理的・法的・社会的課題）に取り組むURAの在り方」

第9回（2024年3月、東京大学）「JINSHA kaleidoscope

— 人社系研究のコアバリューを引き出す研究支援のあり方とは —



11

人社系URAネットワークの今後の活動について

第10回 RA協議会 年次大会 ポスター発表 (P016 P-2-8)

代 表：川人 よし恵(大阪教育大学)、新澤 裕子(東京大学) 幹事校のURAが協力

「機関をこえたURA連携の意義とは ～人社系URAネットワーク10年の軌跡と展望」

※キーワード：人文・社会科学系、URAネットワーク、議論の場づくり、研究推進

第10回 人文学・社会科学系フォーラム 主催校：神戸大学&新潟大学 ダブル主催！

テーマ：「人社系研究の社会貢献—“シンダイ”から世界へ—」(予定)

開催日&場所：2025年3月10日（月）@神戸大学

詳細が決まり次第ご案内いたします



新潟大学URA
Niigata University Research Administrator

12

評価と社会的インパクト ～評価学の視点から～

明治大学 公共政策大学院 ガバナンス研究科・教授 源 由理子

はじめに～評価学との出会い

ただいまご紹介いただきました明治大学公共政策大学院ガバナンス研究科の源です。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

私は、評価学を研究しております。これまで「研究評価」については全く話したことはなく、研究評価の研究も行ったことがないので、私がお引き受けしていいのですかと申し上げたのですが、評価学の視点で最近いろいろ耳にする「社会的インパクト」はどのように捉えられるのかという話をしてほしいというご依頼でしたので、お受けすることにいたしました。この後、押海さんの方で研究評価についてのお話がありますので、そちらにつなげるような形で、評価学という視点に立ったときに、「社会的インパクト」をどのように考えることができるのかというお話をいたします。

今日はフロアの方に、評価学会から研究評価のご専門の方も来ているので、少しやりにくいところもあります。私自身は、評価の中でも、特に国際開発領域、社会福祉領域や文化芸術領域における評価の実践と研究を20年ぐらい行っています。

まず自己紹介をさせていただきます。私は大学を卒業してすぐJICAに就職し、国際協力の領域で仕事をしてまいりました。ご存じかもしれませんが、JICAや国際機関には、多額の評価予算がついています。おそらく今でも日本の中で評価のための予算が一番多く配分されていると思います。評価の予算といえば、コンサルタントへの委託料が主ですが、評価調査にかかる多額の予算がついていて、そういう意味で実務の中で評価に携わったのが、私の最初的评价学との出会いです。

評価調査に従事し始めた頃の私は、評価というのは測定できればいい、つまり、社会調査のノウハウがあればできるのではないかと、指標を測定し定量的に把握して統計分析するものではないかと、そういうイメージを持っていました。

ですが、ケニア・ナイロビのスラム地域での生活改善プロジェクト評価の仕事を担当した時—— JICA を辞めてからの仕事ですが——、資金提供者側が決めた指標だけで評価していいのだろうかという疑問が湧いてきました。貧困地域の生活が改善したという状態を評価するのに、資金提供者が決めた指標を測定するだけでいいのだろうかと思ったわけです。当事者である地域の人々、つまり調査対象となるコミュニティの人々がどのように考えているのかを考慮しなくていいのだろうか、ふと思いました。とても難しそうな評価だから、この仕事に従事することはやめようかと思ったくらいです。20年以上前のことですが、当時は日本には評価についての文献がほとんどなかったので、評価について調べてみようとしてアメリカの文献を読んだ時に、参加型評価というアプローチがあるのを見つけました。そのアプローチは、関係者つまり専門家も実施に関わった人たちも当事者も、みんなで何を価値あるものとして測るべきかを一緒に議論していく場を含んだ評価、対話を含んだ評価というアプローチでした。その時、これは、もしかすると面白いかもしれないと思いました。測定は評価調査の一部で、測定されたものをどう価値判断するのが評価だと定義したときに、その価値を決めるのは誰なのかという大きなテーマがあったからです。そんなところから評価にどんどのめり込んでいったという経緯になります。

最近取り組んでいる領域は、先ほど申し上げた社会福祉分野や芸術文化分野に加えて、政策評価や自治体・行政評価等になります。あと、社会的インパクト・マネジメントにも取り組んでおりますが、これが、今日お話しする社会的インパクトに関連する領域と重なると思います。

最初に申し上げておきますが、評価学において、社会的インパクトがこう捉えられるという共通の理解があるわけではありません。同じように混乱しています。ですから、今日私がお話しする内容は、私見も入っておりますが、評価学の基本に立ち戻ったときにどのようなところを考えていかなければならない

のか、もしかしたら新しい評価の領域として学会も含めて関係者と共に取り組む必要があるのではないかと感じております。そのあたりをお話ししたいと思います。

今日の構成です（スライド3ページ）。Part1「評価学における“評価”の考え方」で、主に「プログラム評価論」をご紹介します。後ほどご説明いたしますが、そもそも評価事業や、何らかの社会的介入の評価はどういう特徴があるのかが一点目となります。二点目は、評価学における「インパクト評価」という言葉と「社会的インパクト評価」の関係、評価学の視点で見たときに社会的インパクト評価はどのように捉えることができるのかということ、先ほど中野さんからインパクト投資の話がありましたが、そのあたりと合わせてお話できればと思います。最後に評価学の切り口から、研究評価について皆さんはどのように考えますかという問いかけで、まとめさせていただけたらと思います。

評価学における“評価”の考え方～プログラム評価の紹介

〈評価の定義と評価の目的〉

最初に評価学による評価の考え方です。実は、評価学という確立したものがあるかどうかは、心もとないところではあります。学会自体は、2000年に政策評価法が施行された時に設立された、比較的新しい500人くらいの小規模の学会で、その中にも様々な領域の方たちが入っておりますので、評価を横断的に捉えたとき、多様な議論ができる場ではないかと私は考えております。その中で、中心的方法論として一定の合意を得ている「プログラム評価論」、英語の Program Evaluation を訳していますが、こちらの方法を中心にお話しさせていただきます。評価といっても、人事とかプロダクトの評価とかいろいろありますが、このプログラム評価論は、特に社会的介入（social intervention）プログラムの評価で使われている方法論です。評価の方法論として、ある程度確立している領域ですし、今回のテーマとプログラム評価論の視点が良く合うのではないかと思います。「評価は理論と実践の融合である」と言われるように評価には実践が伴わないと全く意味がありません。そういう意味では、応用

社会科学であり、もっと言い換えると、評価のアプローチそのものが、社会の変化に応じて変化したり、新たなアプローチを提案したりすることになる等の特徴が強い領域だと考えております。

次に評価の原義についてです（スライド5ページ）。定義のようなものですので、ご存じかもしれません。とかく評価というと、私たちには成績表とかランキングとかそういったイメージがありますが、エバリュエイト（evaluate）はもともとラテン語で、eというのは引き出すという意味、バリュー（value）は価値だと考えると、評価とは評価対象の価値を引き出す行為であるとよく言われます。つまり、評価という道具を使って、取り組んでいることの価値を高めていくことが評価そもそもの目的ということになります。先ほど冒頭で申し上げましたように、私はケニアのプロジェクト評価に関わっていましたが、プロジェクト評価に関わる前は、指標を測定する、つまりデータを収集していくような社会調査ができればいいのだと思っていた節がありました。もちろん、指標の測定も非常に重要なのですが、それはイコール評価ではない。評価とは、事実の特定にその価値判断が加わるということだと言えます。

例えば、何らかの状況が50%改善したという事実を、50%も改善したと言ったり、50%しか改善しなかったと言ったりすることがあります。これは誰の判断でしょうか。そういう意味では、評価行為は客観的ではないかもしれません。データはできるだけ客観的に集めるべきだと思いますが、それをどう価値判断するのか、どういう合意形成のもと判断していくのかが、非常に重要になってきます。

「評価は物事のメリット、値打ち、意義を体系的に明らかにする」と定義されます。「メリット」というのは、そもそも実施していることが内在的に持っている本質的な価値と捉えることができます。「値打ち」は、貨幣のような共通のものさしを使って、共有の価値として持っているものです。貨幣は価値基準の一つで、他にも基準になるものはあると思います。「意義」は、誰にとって重要なのか、実施組織のミッションにとってどういう意味を持つのかになります。価値といっても、メリット、値打ち、意義といった複数の視点から捉えていく必要があります。

プログラム評価論というプログラムは、社会的介入、つまり、何らかの社会的目的を持つ事業やプロジェクト、行政であれば政策や施策、そういったものを指します。また何らかの社会的課題解決や社会的価値創造を目的とした事業の評価も、プログラム評価で体系的に評価することができます。評価の方法は、社会調査手法等を使ってプログラムの有効性を体系的に評価するのですが、各プログラムを取り巻く政治的な要因や社会的要因は多様ですので、一つの方法が全てに適用できる訳ではありません。その意味で、評価のアプローチは、評価の目的や評価結果の利用者に応じてカスタマイズされるべきだとされています。テラーメイドという言葉を使っていますが、評価対象となるプログラムの文脈に合わせて評価のアプローチを考えないと評価結果は使われないものになってしまいます。評価結果の活用とは、社会状況を改善していくための社会的活動の情報源になるということであり、それがプログラム評価の目的であります。そうであれば、使われないものを発信しても意味がなく、また評価に使ったお金が無駄になります。こういった点が、プログラム評価の大きな特徴となります。

プログラム評価論というところの評価の特性について、もう少しお話しさせていただきます。評価の活用目的には大きく分けて三つあると言われています（スライド7ページ）。

まず一つ目は、事業の評価結果を事業の改善に使っていく、あるいは何らかの変革に使っていくというものです。改善は今あるものを良くしていくというイメージですが、変革とはトランスフォーメーションですから、全く違う形で新しく目指すものというイメージです。二つ目がアカウンタビリティ、つまり説明責任の確保、三つ目は新たな知識の創造です。

一点目の改革・改善という意味で重要になるのが、インパクトや成果よりも、どちらかという実施のプロセスだと思っています。活動を実施しているプロセスそのものは妥当なのか、本当にこの方法でいいのかを評価し検討します。

二点目のアカウンタビリティで、理論的に言われるのは、資金提供者に対する説明責任です。もらったお金を使ってこれだけの成果がきちんと出せたこと

を説明する責任となります。ですが、目標が達成されたと言ったとき、そもその目標設定が誤りだったらどうなるでしょう。そういう意味では、私はアカウンタビリティには、リスポンシビリティ（responsibility）という概念も入ってくるのではないかと考えています。これは、目指すことが妥当なのか正しいのかという実施内容に対する責任を意味しています。またアカウンタビリティなので、誰に対しての説明責任なのかの検討も必要です。資金提供者なのか、あるいは地域や社会の人々なのか、また何らかの課題解決という意味では、その課題を抱えている当事者に対する説明責任なのか、社会全体に対する説明責任なのか、それによって評価でどういうところを重点的に見ていくのかも違います。発信の仕方も、誰に向けて説明責任を果たしていくのかによって異なると思います。

それから三点目として新たな知識創造です。これは、評価研究という分野になると思います。評価をすることによって新たな知見を発見するという実証研究を踏まえた取り組みというのは、このジャンルに入るのではないかと思います。

この三つが独立して存在するというよりも、互いに影響しあっているため、境界線を引くのは結構難しいと思います。この評価がどのように、誰に活用されることを目的に行われているのかということは、評価結果を社会状況の改善に使うという意味ではとても重要なポイントになってくると思います。

さらにその目的によって評価主体が分かれてきます。内部評価や自己評価もあれば、外部評価、第三者評価もあり、関係者とともに評価を行うこともあります。冒頭で申し上げたケニアの事例のように、多様な関係者が評価を行う過程で何らかの価値を相互の協働の中で生み出していく、そういうプロセスを含む評価のアプローチもあります。

このようなプログラム評価の三つの特性から見る「評価」の要諦・特徴が三点あります（スライド9ページ）。三点目は今申し上げた、評価の目的によってアプローチが異なるということですが、一点目の「結果や成果を見ることだけが評価ではない」とは、実施プロセスも重要になってくるといことです。二点目が「評価対象であるプログラムの構造を明らかにする」ですが、自分た

ちが何を評価対象にしているかがわからないと、どういう評価が必要なのかもわからないという意味になります。

これらの特徴に関連して、プログラム評価の中心的な考え方が二つあります。一つ目は、スライド9ページの一点目に挙げている「評価5階層」という考え方で、決してインパクトや結果・成果だけではなく、プロセスも重要であるという点です。この後、ご説明します。二つ目に、評価を行う前に評価対象が評価可能なかどうかを考えなくてはならないということ、つまり Evaluability Assessment だと思っています。そして、どのような構造で何を狙いとして、どのような目的でどんなことを実施しているのかを検討するために、ロジックモデルや変化の理論を道具として使用するということになります。これらについて触れたいと思います。

＜“プログラム評価”の複合的視点：評価は結果や成果をみることだけではない＞

まず、複合的な評価の視点です（スライド10ページ）。評価は結果だけを見るものではないという事例の一つとして、あるNPOの生活困窮世帯の子どもへの学習支援があった場合に、学習支援を行うと子どもの学校での成績が上がるという仮説を立てて活動しているとします。皆さん、これをどう思われますか。本当に目的はこれでいいのか。学校の成績が上がることを目的にしているのか。仮に、子供の学校での成績が上がることを目的に置いたとして、学習支援はこのやり方だけで十分なのか。これらは、戦略に関わる問いです。この設計でいいんだろうかという視点です。あるいは実施プロセスでは本当にきちんと支援が行われているのだろうか。これはプロセスの妥当性を問う視点です。このように、事業の評価を求められたときには、複数の視点のクエスチョンが出てくる可能性があります。

プログラム評価では、五つの評価の視点があると言われています。スライド11ページの一番下からです。まず、ニーズ評価です。そもそも事業が目指そうとしていることはこれで妥当なのかを評価します。非常に重要なポイントですが、実際の事業では十分に把握されていないことが多いところです。またこれは事業を実施する前の評価です。次にセオリー評価では、このやり方で成果

を上げることができるだろうか、本当に事業設計は妥当なのだろうか、などを評価します。妥当性の中には、倫理的な視点も含めて、持続可能性など様々な視点が入ってくると思います。三点目が実施プロセスの評価です。そして四点目にプログラムのアウトカム、つまりインパクト評価となります。インパクトやアウトカムを社会課題解決型で捉えたときには、当然ニーズ評価と呼応します。これが問題だから、こういったプログラムを実施するのですが、インパクト評価では当初のニーズは満たされているかが評価される。最後にもちろんお金、効率性です。投入した資源に見合っってこのような結果が出ているのかどうかを評価します。このように複数の視点で見ることになります。

このような「評価の複合的視点」が意味するところを、私は次のように考えています。どのような指標で成果を見るのかの前に、そもそもどのような社会課題を解決しようとしているのか、あるいはどのような社会的価値を創出しようとしているかの問いかけがまず必要だということです。また、インパクトやアウトカムの達成は、一つの介入で可能なのかという問題もあります。ここはおそらく社会的インパクトと関係すると思いますが、複数のステークホルダーが関係し合うことで生み出されるものが多いと思います。それは社会が多様なステークホルダーで動いているからですが、それを一点の介入だけで達成するのは難しいと考えます。そういった意味で、関係者間の対話や討議・熟議を通して、何をもってよしとするのかという議論が必要だと考えています。一回の「評価調査」ではなく、継続的に評価の視点を持つということが、5階層という複数の視点から評価をする意義になります。

〈評価ツールとしてのロジックモデルの特徴：アウトカム志向とプロセス重視〉

二点目がロジックモデルになります。これは、皆さんご存じのことだと思います。インプット、活動、アウトプット、アウトカムという構成要素で捉えています。ここで重要なのは、インプットからアウトプットまでがプロセス理論と呼ばれていて、マネジメント側がコントロールできるとされている点です。もう一つ、インパクト理論がありますが、ここではこういう活動をしたらインパクトが生まれるだろうという仮説を立てます。このインパクトは、

インパクト理論の言うところのインパクトですが、これはロジックモデルそのものの言葉ではアウトカムとなります。ですので、アウトカムを評価するといった場合は、アウトカムの測定ではなく、評価をするという意味で、インパクト評価と私はイコールだと思っています。

そこで重要となるのが、帰属性です。本当にこの介入のおかげでインパクトが生れたのか、他の要因でないのかを分析します。当然、インパクトは介入以外の要素がとて多いわけです。これはどんな小さな介入でもおそらくそうです。ですので、この点がこの後、社会的インパクトを見るときにキーになる部分だと思います。つまり、インパクトは外部要因の影響が大きいということになります。スライド 15 ページをご覧ください。実は先ほど事例としてお示した、学校の成績が上がることを目的にするという NPO は、実際には、子供が勉強を楽しみ、希望を持って自分の進路に歩み出せるようになるという目的で取り組んでおり、これが実施組織である NPO のミッションとなっています。つまりこの NPO は、子どもたちの自己肯定感が低いことが問題だから、子ども支援に取り組んでいる。そうであれば、プロセス理論に示された介入だけでは不十分で、より帰属性を高めるために、スライド 16 ページの縦のロジックモデルを見ていただくとわかるかと思いますが、保護者への働きかけや、地域社会、様々なステークホルダーへの働きかけがなければ、子どもたちは地域の資源とつながりながら自分たちで立ち向かい、希望の進路に歩み出せるようにはならないだろうということです。ロジックモデルというのは、プロセスを見直していくための共通の言語のような働きがあります。また、その帰属性の部分が評価の際に非常に重要になってくるということでもあります。

ただし、こういった「プログラムの構造化」を考えたときに「手段—目的」の構造をあらかじめ推論することが全てのプログラムで可能かどうかという課題に直面します。これは現在、芸術文化領域の評価を行っていて、本当に実感しています。ロジックモデルをきれいに最初から書くエビデンスがあれば別ですが、そもそも取り組んでいることの特性を捉えたときに、あらかじめ目的を設定すること自体がその介入の本質的価値を削ぐかもしれないという、そういう問題が出てくるわけです。これはおそらく社会的インパクトを考えるときも

関係するのではないかと思います。

二点目に書きましたように、介入の「本質的価値」を内在的価値としたとします。それから、「手段的価値」、これは外在的価値です。例えば、地域のアートプロジェクトでは、多様なアートの試みを介して、そこにいる人々や一緒にクリエーションプロセスに参加した人たちが、自分たちの多様な価値との関わりや、遭遇から生まれる新たな価値を生み出していきます。これはアートだから生まれる本質的な価値だと捉えることができると思います。目的として、例えば、アートを通して多様なルーツを持つ人たちとの共生文化が育まれるという社会的な目的、公共的な価値のようなものがあつたとします。こういう目的を前提に助成金が付くとします。そのようなプログラムを評価する際に非常に難しいのが、この帰属性です。アートに接する、アートに参加する、アートであるからこそ生まれる価値という本質的なものと、それが何らかの社会課題解決に結びつく。ですが、この間にある結びつきについて、いわゆるエビデンスを示して介入を実証的に見ていくのは非常に難しい。なぜなら、そこには様々な外在的要因の影響があるからです。ではどうしたらいいのか、という点は今模索をしているところでもあります。

「インパクト評価」と「社会的インパクト評価」～新たな評価の可能性?～

〈評価学でいう「インパクト評価」：「帰属性」との関係〉

「インパクト評価」と「社会的インパクト評価」ということで、今申し上げたことを踏まえて私自身が考えているのは、新たな評価の可能性を評価学の中で考えていくことができるのではないかとということです。

評価学におけるインパクト評価は、いわゆる RCT というランダム化比較試験で検証されたりします。RCT では、プログラムに参加した人と参加していない人を比べて、純粋な効果をインパクトと捉えるのがいわゆるインパクト評価のゴールデンドールだと言われています。統制群を立てて行うもので、最初からランダムにプログラムに参加する人と参加していない人を作って、その効果を比較するという方法です。介入したグループと介入のないグループとの差が本当のインパクトだという捉え方です。統制群がないと、観測される効果が

もっと大きくなるわけです。ですが、そのプロジェクトに参加していない人も何らかの影響を受けていますので、参加した人と参加しない人の変化の差が「インパクト」になります（スライド 20 ページ）。

こういう考え方がゴールデンルールとしてある中で、この後押海さんのご発表でも出ると思いますが、エビデンスの序列というものがあります（スライド 21 ページ）。一番上が体系的レビュー、メタ分析、つまりランダム化比較試験したものを複数メタ分析するやり方です。これこそが、科学的なエビデンスだとして、序列の 1 位に位置しており、帰属性を証明する最も科学的な方法だという考え方とされています。そして、この下の順位にいろいろな方法論があります。下の方にポリシーブリーフや専門家の意見といったものや、事例研究などの極めて質的なデータによる評価があります。

私がエビデンスの序列のタイトルにクエスチョンマークをつけたのは、本当にこの序列という捉え方でいいのだろうかという一つの大きな疑問があるからです。それは先ほど申し上げたように、介入によっては帰属性を量的データだけで捉えることが難しいものがあります。あらかじめ量的データで指標を設定し目標値を設定した場合に、本来の介入の本質が歪められるものがあるため、質的なデータも非常に重要になってくると思っています。このエビデンスの序列の出自が医療領域であることを踏まえると、多様なステークホルダーの影響が考えられる社会的介入の領域にそのまま適用していいのだろうかとも考えます。

こういった疑問を持ちながら、一方で出てきたのが「社会的インパクト」という言葉になります。これは趣旨説明で中野さんの方からご紹介ありましたように、民間セクターの動きとして、インパクト投資や ESG 投資の中から出てきています。もともとは環境問題などのマイナスの影響が出た場合に投資を引き上げるというダイベストメントという動きで、1920 年代からすでに現れています。1980 年代からは、国際 NGO 等による環境活動でのネガティブスクリーニング、例えば武器輸出をしている、採掘による影響があるなど、環境に悪い影響を与える企業に対しては投資をしないという動きが出てきております。この背景には国連などが中心になって、様々な動きがあったということも

あります。それを受けて、社会的責任投資という考え方が出てきます。世界的に一番大きな資産運用会社が、社会にネガティブな影響を与えるものに対しては投資をしないという決定をしたということも投資行動に影響を与えたと思います。ESG投資や社会的インパクト投資では、経済的リターンと社会的リターン、この両方を見なければならぬとされています。それぞれの割合の程度は違いますが、基本的にその両方を、しかも民間セクターがCSR（企業の社会的責任）として実施するというよりも、本業として社会的課題解決に参入していくという動きが出てきました。その中で生まれた言葉が実は「インパクト」ということになります。ここで言うインパクトは、評価学のインパクト評価とは出自が全く違い、資本市場での活動の成否を判断するものさしであるということになります。こういった正負の社会的、環境的価値、つまり、これが社会的インパクトですが、これを見える化する必要性が出てきたということになります。先ほどご紹介がありました内閣府や、他にもいろいろな文献で定義がなされています。

スライド24ページにあります、Epstein & Yuthasによる「活動や投資によって生み出される社会的・環境的变化」という定義は、投資を背景にして出てきていると思います。また、インパクト測定マネジメント（IMM）については、GIINという世界的な投資ネットワークが、効果的なインパクト投資を行うために不可欠であり、マイナスの影響はできるだけ軽減してプラス面を増やすための方法が含まれる本質的に反復的なものだ、と言っています。これについて、私は「社会的インパクト評価」というのは、どちらかというところ「社会的インパクト・マネジメント」だと捉えております。投資家と企業は、できるだけネガティブな面を出さないようにPDCAを回し、社会的リターンを増やしていく。かつ、もちろん経済的リターンも十分出していくということを、投資家が投資する前から企業と一緒にマネジメントしていく。そういう動きになります。

あと、投資家の視点として、社会的インパクトを生み出すためには、複数の企業の動きを見る必要があります。一つの企業の働きだけで社会的インパクトを生み出すのは難しい。先ほどもロジックモデルのところで申し上げました

が、社会的影響を生み出していくためには、おそらく一つの介入だけでは難しく、多様なステークホルダーが関わる、あるいは、ここで言えば多様な企業が関わるポートフォリオを前提としてインパクトを見ていくという動きになります。

そういった意味で、評価学の視点から「社会的インパクト評価」を見たときに、私は三つぐらいの特徴があると思っています。

まず一つ目に、「社会的インパクト評価」というのは、どちらかという社会、あるいは外部からの要請であるだろうということです。そういった意味では、評価の目的としては、アカウンタビリティの側面が強いのではないかと考えています。先ほど社会的責任投資という言葉がありましたが、投資家と事業実施者との関係性を築き上げなければ持続可能な社会とならない、という中で論じられてきたのが社会的責任投資です。どちらかという投資家、いわゆる機関投資家の視点がかなり強いです。機関投資家が投資してくれなければ企業は成長できません。両者は非常に重要なパートナーでありつつ、その中で社会的責任を果たすことになります。この点が、今回、人社系 URA ネットワークの皆さんから教えてもらった「責任ある研究・イノベーション (RRI)」という考え方と似ていると思っています。文献を読んで、似ているところがあるなと思いました。つまり、アカウンタビリティというのは、先ほど申し上げたように、資金提供者に対する説明責任だけではないので、誰に対するアカウンタビリティなのかを考える必要があるのではないかと考えています。

二点目が、「社会的インパクト評価」とは、評価学でいうところの「インパクト評価」とは必ずしも同じではないということです。私も内閣府の社会的インパクト評価検討ワーキング・グループに入っていましたが、当時、Impact Measurement and Management を「社会的インパクト評価」と訳した時、評価学会から反対がありました。これはインパクト評価ではない、エビデンスをきちんと出していくインパクト評価とは違うので、違う評価だ、という意見が出ました。確かにそうです。先ほどの定義を使うと違う。どちらかというマネジメントで、できるだけ負のインパクトをもたらしさないようなマネジメントをしているか、ミッションを踏まえた妥当な戦略形成がされているかどうかを

評価する。これは、プログラム評価の5階層でいうとセオリー評価ですが、そういった視点が強いかもしれません。

三点目が、参加型とか協働型という評価アプローチとの類似性です。つまり多様なステークホルダーとの協働プロセスから生み出される「価値」を創出し、可視化していく——そういう動きは、先ほど少し紹介したステークホルダーとともに評価をしていくというアプローチに似ているところがあるかもしれないという点です。そして、関係者間の合意形成をとおした推論です。これは仮にエビデンスを量的に見るのが実証主義に基づく研究だとすれば、私は構成主義的なアプローチだと思います。つまり現状どのような価値が生まれていて、それをどう可視化してどう積み上げて、見せていくか——質的で構成主義的なアプローチが「社会的インパクト評価」にあることを検討する余地があるかもしれないと考えています。

最後に、研究の「評価」への問いかけをして、押海さんにおつなぎいたします。評価学の視点から改めて問い直したときに、研究評価は、誰が評価主体で、何を評価対象とするのが問題になると思います。大学評価なのか研究評価なのか、大学のミッションにおける位置づけはどうか、あるいは活用目的は何で、誰がその評価結果の潜在的な利用者になるのか、です。評価学では、この、誰が潜在的な利用者になるのかを、評価の最初に考えます。そうでなければ評価しても無駄かもしれないからです。誰が使うのかは、どのように評価するのかの検討につながります。最後に、“測りすぎ”の弊害とスライドに書きましたが、研究評価だけではなく、私たちが評価をするときにいつも頭に入れておかなければならないものだと思っています。測りすぎて指標が一人歩きし、測定されることだけに注目が集まり、本質的な価値を阻害してしまうという部分を、本当に戒めなければならないと考えています。

以上が私からです。ご清聴ありがとうございました。

JINSHA情報共有会@北海道大学

評価と社会的インパクト ～評価学の視点から～

源 由理子

明治大学公共政策大学院ガバナンス研究科

2024年10月9日

・ 専門：評価論、社会開発論

- ・ わたしが「評価」に興味をもったきっかけ
 - ケニア国ナイロビ市スラム地域の生活改善プロジェクト
 - 既に決められている「資金提供者側」の指標で測っていいのだろうか、という疑問
 - 「参加型評価」への興味

・ 評価はおもしろい・・・かも

(最近取り組んでいる領域)

- ・ 社会福祉分野
- ・ 芸術文化分野
- ・ 政策評価、自治体行政評価
- ・ NPO事業評価、企業CSR評価
- ・ 社会的インパクト・マネジメント、等

自己紹介

本日の構成：

Part I: 評価学における“評価”の考え方：「プログラム評価」の紹介

- 評価の定義と評価の目的
- “プログラム評価”の複合的視点：評価は結果や成果を見ることだけではない
- 評価ツールとしてのロジックモデルの特徴：アウトカム志向とプロセス重視

Part II: 「インパクト評価」と「社会的インパクト評価」

- 評価学でいう「インパクト評価」：「帰属性」との関係
- 「社会的インパクト評価」の出自：IMMから考える

最後に：「研究評価」への問いかけ

©2024 Yuriko Minamoto. All rights reserved.

3



Part I: 評価学における“評価”の考え方：プログラム評価の紹介

“評価は理論と実践の融合である”

©2024 Yuriko Minamoto. All rights reserved.

4

評価の原義

e + value + ate

“評価は評価対象の価値を引き出すものである”

評価 = 事実特定 + 価値判断
指標の測定 ⇔ 評価

製品、人事、組織、事業などいろいろ

- ・「評価は物事のメリット、値打ち、意義を体系的に明らかにすることである」

(Scriven 1991)

“Evaluation is the systematic determination of merit, worth and significance of things”

©2024 Yuriko Minamoto. All rights reserved.

5

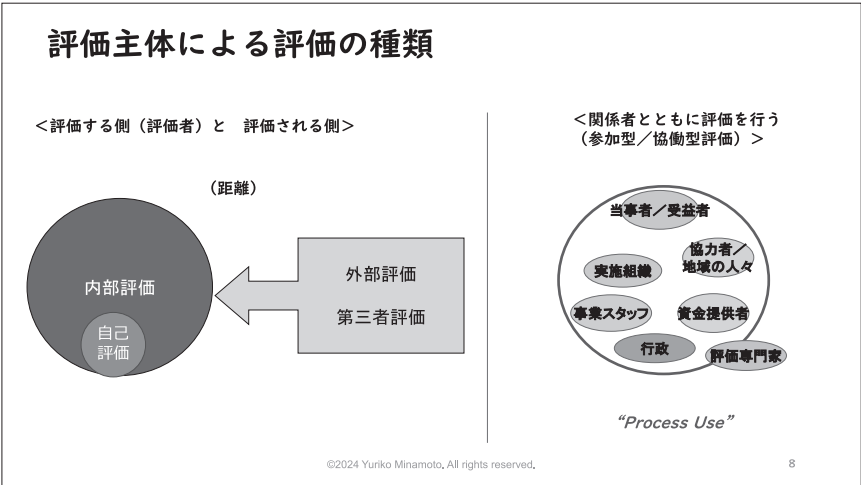
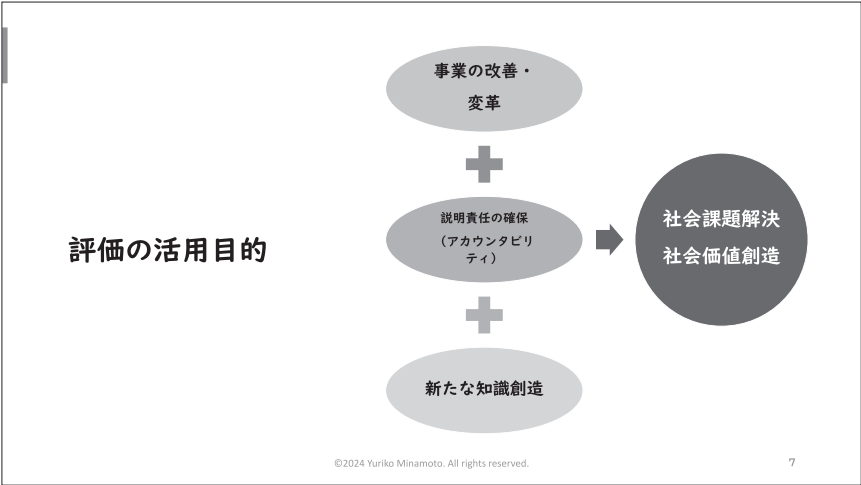
「プログラム評価 (Program Evaluation)」の方法論について

[出典：Rossi, Lipsey & Freeman 2004:29]

- ・プログラム：
 - ある社会的目的をもつ介入（政策、施策、事業、プロジェクト、活動群等）
 - 何らかの社会的課題解決、社会的価値創造を目的とした事業
- ・評価の方法：
 - 社会調査手法を使い、プログラムの有効性を体系的に評価
 - プログラムを取り巻く文脈を考慮して行うもの（評価のカスタマイズ）
- ・評価結果の活用：
 - 社会状況を改善していくための社会的活動の情報源となるものを提供

©2024 Yuriko Minamoto. All rights reserved.

6



プログラム評価の三つの特徴から見る「評価」の要諦

1. 結果や成果（インパクト）を見ることだけが評価ではない

- 評価の複合的視点：「評価5階層」
- インパクト志向とプロセス重視

2. 評価対象であるプログラムの構造を明らかにする

- 評価可能性調査（Evaluability Assessment）
- インパクト理論とプロセス理論（プログラムセオリー）の確認
- ロジックモデル、変化の理論（TOC: Theory of Change）など

3. 評価の目的によってアプローチが異なる

- 新たな知の発見か、外部統制への対応か（説明責任）、自己マネジメントのためか（改善・変革）
- 誰が評価するのか（評価主体）

© 2024 Yuriko Minamoto. All rights reserved.

9

1. 複合的な評価の視点

（例）あるNPOの生活困窮世帯の子どもへの学習支援

社会的なインパクト

活動の実施中に直面した困難はないの？どう対応したの？

そもそもめざすことはこれでもいいの？何を「良いコト」としてとらえているのか？

生活困窮世帯の子どもへ学習支援を行う

（目的・目指す成果：アウトカム）

子どもの学校での成績が上がる

この活動だけで目的は達成できるの？

© 2024 Yuriko Minamoto. All rights reserved.

10

プログラム評価の5階層 (Rossi, Lipsey and Freeman, 2004: 80)

〔評価は結果や成果をみることだけではない〕

プログラムの効率性評価:

投入した資源に見合っているだろうか?

プログラムのアウトカム/インパクト評価:

成果はあがったのだろうか/ニーズは満たされただろうか?

プログラムのプロセスと実施の評価 (プロセス評価):

実施過程に問題はないか?

プログラムのデザインと理論の評価 (セオリー評価):

このデザインで成果をあげることができるのだろうか? 事業の設計は妥当か?

プログラムのニーズ評価:

事業がめざそうとしていること (社会的ニーズ、社会的に生み出したい価値、ターゲットグループなど) は妥当か?



©2024 Yuriko Minamoto. All rights reserved.

11

“評価の複合的視点”が意味するところ



- どのような指標で成果を見るのかの前に、そもそも「どんな社会課題を解決しようとしているのか」、「どんな社会的価値を創出しようとしているのか」の問いかけがまず必要
- 社会的介入によるインパクト (アウトカムの達成) は、複数のステークホルダーが関係し合うことで生み出されるもので、関係者間の対話・熟議をとおして、何をもち「良しとするのか (評価基準)」の議論がまず必要

©2024 Yuriko Minamoto. All rights reserved.

12

(参考)

“評価的思考”で次のアクションを起こす

評価的思考 (evaluative thinking) とは、

- ・ 物事が起こる道筋が見える化し、
- ・ 意味のある問いかけを投げかけ、
- ・ 振り返り (省察) や、異なる視点に立って、物事を深く理解しようとし、
- ・ 情報に基づいた決断を下し、行動を起こす、

行動・認知プロセスである。

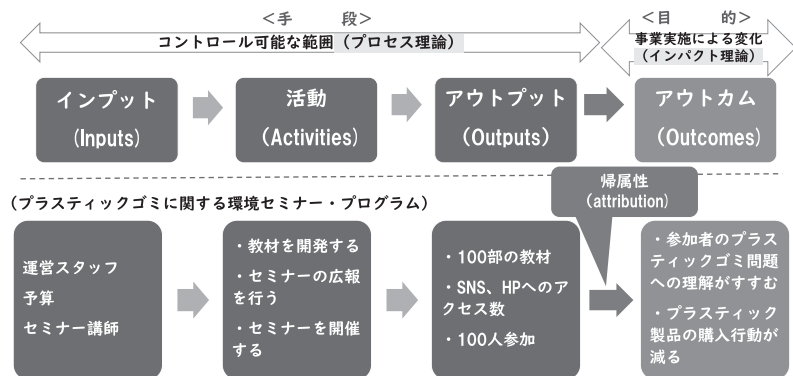
(出典：Archibald & Buckley, 2015をもとに源訳)

©2024 Yuriko Minamoto. All rights reserved.

13

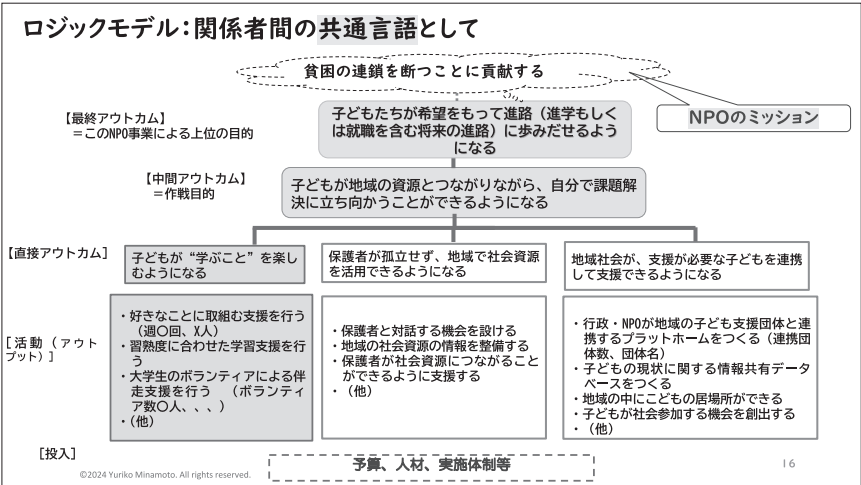
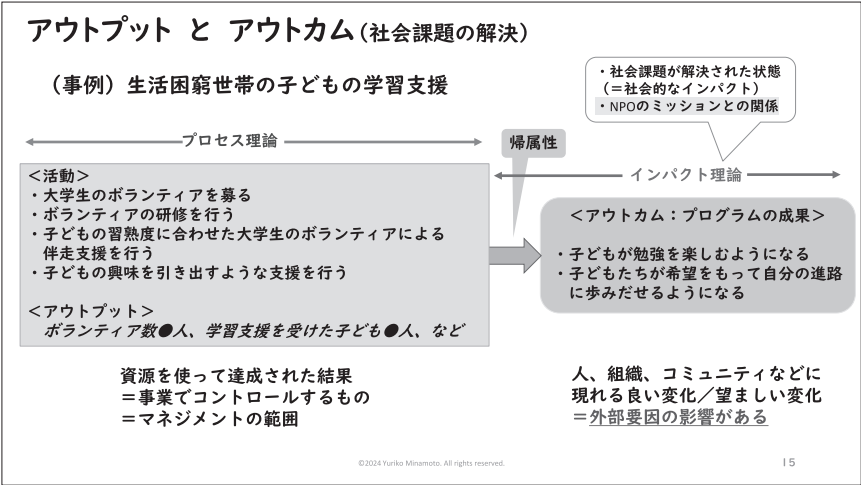
2. ロジックモデルの構成要素

出所：源（2020：44）図2-6に一部加筆



©2024 Yuriko Minamoto. All rights reserved.

14



“プログラムの構造化”を考えるとときに直面する課題

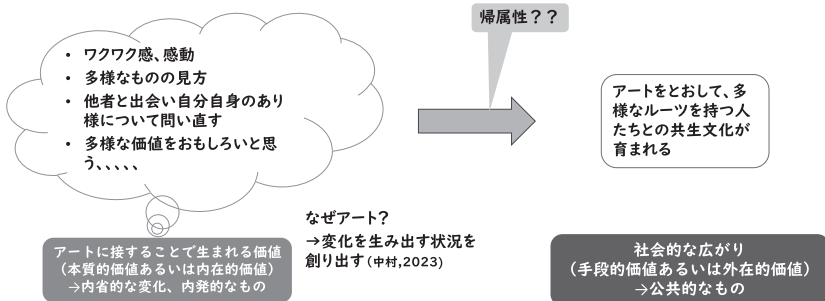


- 「手段-目的」の構造をあらかじめ推論することが、すべてのプログラムで可能か？
- 「介入の本質的価値（あるいは内在的価値）」と「手段的価値（あるいは外在的価値）」という考え方
（例：芸術文化領域）

©2024 Yuriko Minamoto. All rights reserved.

17

芸術文化領域における議論



©2024 Yuriko Minamoto. All rights reserved.

18



Part II: 「インパクト評価」と「社会的インパクト評価」 ～新たな評価の可能性?～

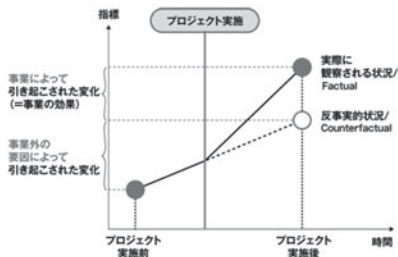
©2024 Yurika Minamoto. All rights reserved.

19

評価学における「インパクト」と「インパクト評価」について

インパクト評価概念図：

実際に観察される状況と反事実の状況との比較



インパクト：

介入（事業）による変化から、介入がなかった場合の変化（反事実）を差し引いたもの／純効果

RCT（ランダム化比較試験）等で因果関係の確からしさを検証する評価方法が最も科学的とされる

Methodology driven

出典：JICAインパクト評価サイト <https://www.jica.go.jp/activities/evaluation/>

©2024 Yurika Minamoto. All rights reserved.

20

エビデンスの序列???

エビデンス＝ある介入行為に対する因果的な検証結果＝インパクト評価の結果

順位	方法論	
1	体系的レビュー、メタ分析	新薬の有効性を示すエビデンス／福祉領域の対人サービス分野のエビデンス等
2	ランダム化比較試験（RCT）	
3	コホート研究	
4	時系列研究	
5	統制群のある事例比較	量的データ／統計分析
6	横断研究	
7	事例研究、質的評価	
8	経済評価	
9	語りのレビュー	
10	ポリシーブリーフ、専門家の意見	

©2024 Yuriko Minamoto. All rights reserved.

出所：Crossick & Kaszynska（2022:266） 21

“科学のエビデンス”がすべてなのか？

～評価研究から政策評価への流れ～

実用重視型評価の登場（Theory Driven）1970's～

- 活用される評価への関心
- 実施プロセスを見ることも必要
- ロジックモデルによりプロセス理論とインパクト理論を明らかにしていく

文脈による違い

- 一般化が必ずしも目的ではない
- 実証研究から、質的研究の要素を入れた評価へのシフト

参加型、ピアレビュー、専門家による討議・熟議

- 何をもって「価値あること」と判断するのか

©2024 Yuriko Minamoto. All rights reserved.

22

社会的インパクト：民間セクターの動き

*出所：今田（2024）を参照し作成

企業活動から派生する負の影響（環境問題等）を低減するためのダイベストメント（1920's～）

国際NGO等によるネガティブスクリーニング（1980's～）



社会的責任投資（SRI）、ESG投資、インパクト投資

「経済的リターン」 vs. 「社会的リターン」



民間セクターが本業として社会課題解決に参入

“インパクト”：資本市場において活動の成否を判断するものさし



正負の「社会的・環境的価値」（＝社会的インパクト）を見える化する必要性

©2024 Yuriko Minamoto. All rights reserved.

23

「社会的インパクト評価」という言葉の登場：投資判断としての要請

・社会的インパクトの定義

- － 「活動や投資によって生み出される社会的・環境的变化」（Epstein & Yuthas, 2014）
- － 「短期・長期の変化を含め、当該事業や活動の結果として生じた社会的・環境的なアウトカム」（内閣府、2016）

・IMM（Impact Measurement and Management:インパクト測定・マネジメント）

- － GIIN（グローバル・インパクト投資ネットワーク）
- － 「効果的なインパクト投資を行うために不可欠で、自らの投資アプローチが人々と地球に与えプラスとマイナスの影響を特定し、特定の目標にそってマイナス面を軽減し、プラス面を最大化するための方法が含まれる」「本質的に反復的（iterative by nature）」である。



➤ 二つの動き

- ① 投資家と企業によりPDCAサイクルを回す
- ② 投資家の視点：社会的インパクトを生み出すためには複数の企業を動きを俯瞰したポートフォリオレベルのインパクトを見る*

©2024 Yuriko Minamoto. All rights reserved.

*出所：林（2024）

24

評価学と「社会的インパクト評価」

外部からの要請 => アカウンタビリティ	「インパクト評価」とは 必ずしも同じではない	「参加型／協働型評価」 のアプローチとの類似性
- 投資家と事業実施者との関係性を築きあげなければ、持続可能な社会とならない（社会的責任投資：SRI） - 責任ある研究・イノベーション（RRI）との類似性*	- マネジメントの関与：できるだけ負のインパクトをもたらしさないようなマネジメントに重きをおいている - ミッションを踏まえた妥当な「戦略形成」（セオリー評価）の視点	- 複数のステークホルダーとの協働プロセスから生み出される“価値”の創出と可視化 - 関係者間の合意形成（納得性）をとおした推論

*参考：吉澤（2013）

©2024 Yuriko Minamoto. All rights reserved.

25

最後に：研究の「評価」への問いかけです

- 誰が評価主体で、何を評価対象（評価対象の構造）とするのか
 - 大学のミッションにおける位置づけ？
 - なぜ「研究評価」なのか
- 活用目的は何で、誰がその評価結果の潜在的利用者（potential user）なのか
 - 誰が評価結果を使い、何に活かすのか
- どのように評価するのか
 - 研究が生み出す社会的・環境的な「価値」をどのように言語化・可視化するのか
 - “測りすぎ” * の弊害：本質的な価値との齟齬を生み出す危険性

* Muller（2018）

©2024 Yuriko Minamoto. All rights reserved.

26

(参考) 社会的介入に関する評価論の系譜

出所: 源 (2016) を基に加筆・作成

評価目的・文脈ごとに方法論を選択する

I. 1960's- : 科学的評価の主流化

- ‘科学的に正しい’ 根拠 (エビデンス) を提供することが評価の役割 → EBM (Evidence Based Medicine)
- 実験デザイン手法等による「介入」と「成果」の帰属性を問う

- Truth ‘科学的に実証された真実’

- Methodology driven
- 定量評価/インパクト評価/外部評価

II. 1970'- : 実用重視の評価

- ‘役に立つ’ 知識を提供、あるいはその活用を促すことが評価の役割 (プログラム評価、参加型評価という言葉の登場)
- 政策評価の領域からの問題提起

- Use 実用、活用

- Theory driven
- 定性評価の導入/プロセス評価
- 内部評価、参加型評価

III. 1980's- : 不確実性に対応した評価実践の提案

- 評価の目的やおかれた状況によって評価の手法は異なる
- 評価方法をテラーメイドする (プログラム評価論の確立)

- TruthとUseの統合

- 科学的・実用重視

III. 2000's- : 「社会的なインパクト」の要請への対応

- 社会的責任投資、インパクト投資、ESG投資、SDG s 等
- 外からの要請に対するアカウンタビリティの確保

- “impact” driven

- 外在的価値を探る

©2024 Yuriko Minamoto, All rights reserved.

27

引用・参考文献:

- 今田克司 (2004) 「社会的インパクト評価に関する現状整理」、日本評価学会社会的インパクト評価分科会
- 中村美重 (2023) 「文化事業におけるプログラム評価の課題」日本評価学会第24回全国大会発表要旨集
- 林寿和 (2024) 「IMM (インパクト測定・管理) とは何か? 実施主体は企業が、それとも投資家か?」 JANPIA 出資事業部 <https://investment-note.janpia.or.jp/n/nbec47385ac83> (2024.10.7閲覧)
- 源由理子編著 (2016) 『参加型評価～改善と変革のための評価の実践』 見洋書房。
- 源由理子・大島巖共編著、山谷清志監修 (2020) 『プログラム評価ハンドブック～社会課題解決に向けた評価方法の基礎・応用』 見洋書房。
- 吉澤剛 (2013) 「責任ある研究・イノベーション-ELSLを超えて」『研究 技術 計画』28(1)、pp106-122
- Crossick C. & Kaszynska, P. (2016), Understanding the value of ARTS and CULTURE: The AHRC Cultural Value Project, Arts and Humanities Research Council (=2022, 中村美重訳『芸術文化の価値とは何か—個人や社会にもたらす変化とその評価』水曜社)
- Epstein, M.C. & Yuthas, K. (2014), *Measuring and Improving Social Impact*, Berrett-Koehler Publishers(=2015, 鶴尾雅隆・鴨崎貴泰監訳『社会的インパクトとは何か—社会変革のための投資・評価・事業戦略ガイド』 英治出版
- Muller, J.Z. (2018) *The Tyranny of Metrics*, Princeton University Press (=2019, 松本裕訳『測りすぎ: なぜパフォーマンス評価は失敗するのか?』みすず書房)
- Rossi, P.H., Freeman, H. E., and Lipsey, M. W. (2004), *Evaluation: a systematic approach*, 7th ed., Sage (=2005, 大島巖他訳『プログラム評価の理論と方法—システムティックな対人サービス・政策評価の実践ガイド』、日本評論社)
- Scriven, M. (1991) *Evaluation Thesaurus*, 4th ed., Sage Publications



28

大学における社会的インパクト評価と 評価学的アプローチの接続

国文学研究資料館 研究部・特任准教授 押海 圭一

はじめに

源先生に続きまして、私の方からは、「大学における社会的インパクト評価と評価学的アプローチの接続」というタイトルでお話をさせていただきます。

私は大学共同利用機関法人 人間文化研究機構の国文学研究資料館に所属していますが、なぜ私が今回、評価についてお話しするのかについて、はじめにお話しします。私は現在、政策研究大学院大学の博士課程で研究評価の研究をしながら、国文学研究資料館でも人社系研究の評価に関する研究と、所属機関のインスティテューショナル・リサーチ（IR）をやっています。以前、琉球大学でURAとして勤務していた際に、人社フォーラムに入れていただいて、それから人社系URAネットワークの皆様とお付き合いさせていただいています。今回、企画者の中野さんから社会的インパクト評価に関する情報共有会を開催したいとご相談いただき、社会的インパクト評価と評価学をつなげるような話であれば、興味を持つ人も多いのではないかとコメントさせていただきました。また、日本評価学会が開催している評価士養成講座に2016年に参加した際に、源先生にロジックモデルの考え方や使い方について教えていただいたという経緯があったので、大学の社会的インパクト評価と評価学のつなぎ役としては適任ではないかということで、講演をご依頼いただきました。

大学評価における社会的インパクト評価

まず、大学評価における社会的インパクト評価について、なぜこのようなことが起こっているのかを考えてみると、主要な背景が二つあります。一つ目は、大学に対する社会からの要請の変化です。昔は、大学の中で教育や研究を

しっかりやっていたら良いという——もちろんそれだけではないと思いますが——、比較的自由な世界だったと思います。そこに、ニュー・パブリック・マネジメント（NPM）のような考え方に基づいて、行政サービスの質の向上、説明責任の要求が高まってきました。さらに、大学自体が国の政策の中で教育や研究だけではなく、産業振興や地域振興などの他の政策と関連付けられることが増えてきたということもあります。このように、社会が大学に教育や研究の場以上の役割を求めるようになってきているということが背景としてあります。

もう一つは、研究に対する社会からの要請の変化です。ヒトゲノム計画の進行と併せて始まった ELSI（Ethical, Legal and Social Implications）の話や、核技術や環境破壊、エネルギー問題など、科学が発展しすぎることにに対する一般社会からの不安感が高まったことによって、科学側から社会への対応として、ELSI や RRI（Responsible Research and Innovation）のような考え方が広まってきました。さらに、解決すべき社会課題の複雑化によって、これまでの研究スタイルではなく、いわゆるモード2研究やトランスディシプリナリー研究のような手法も社会課題を解決するためには必要だと言われるようになってきています。このように、研究に対しても何かしら社会への貢献が要請されるようになってきています。

ELSI と RRI については CRDS が出している資料を参照してください（スライド5ページ）。これを見ると、ELSI とは「科学技術を基点にして、それが社会との間で生じる倫理的・法的・社会的側面の把握・検討・対処を試みる」という考え方になっています。これが RRI とどう違うかということ、RRI の方が ELSI を包含しているような概念になっています。RRI は、目指すべき社会像や価値観から逆算して、社会が直面している課題に挑戦するために、責任を持って研究やイノベーションを行っていく、という大きな枠組みとして捉えていただければ良いと思います。そして、その中に ELSI も含まれることになっています。

次に、社会的インパクトの定義について確認します（スライド6ページ）。海外の大学評価の中で実際に行われている社会的インパクト評価のうち最も有名なものは、イギリスで行われている Research Excellence Framework（以

下「REF」と記載)です。そこでは、社会的インパクトは「学術界を超えた経済、社会、文化、公共政策・サービス、健康、環境、生活の質への影響、変化、利益」と定義されています。オーストラリアでも Engagement and Impact Assessment (以下「E & I」と記載)という社会的インパクト評価が実施されており、ここでも「学術研究への貢献を超えて」という文言が入っています。オランダでは Strategy Evaluation Protocol (以下「SEP」と記載)という評価を実施しており、「研究によって生み出された知識や技能の(部分的な)結果としての文化的、経済的、産業的、生態学的、社会的な変化」が社会的インパクトであると書かれています。ここから、海外では基本的には学術界へのインパクトだけでなく、そこを超えて広がっていくというイメージで考えられているといえるだろうと思います。また、日本の国立大学法人第4期中期目標期間(以下、「第4期」と記載)に行われる予定の社会的インパクト評価においても「国立大学が、我が国社会の公共財として、学術的な価値だけでなく、社会、経済、国民生活等の進歩に与えた影響」という定義が記載されています。

次に、実際に海外でどのような社会的インパクト評価が実施されているかについて説明します(スライド7ページ)。イギリスのREFについて、直近では2021年に実施され、それぞれの大学から提出されたケーススタディはデータベースに収録されています。それぞれの大学が提出するケーススタディの社会的インパクトを評価し、評価結果によってブロックグラント、これは日本という国立大学運営費交付金のようなものですが、その配分率が変化するようになっています。オーストラリアでは、イギリスとよく似たスタイルでE & Iという評価が実施されていますが、その評価結果は大学への資金配分には影響しない仕組みになっています。REFとE & Iは、それぞれの大学の提出したケーススタディがデータベースに収録されており、日本の大学の社会的インパクト評価を考える際に参考になると思います。オランダのSEPでも、評価結果が大学への資金配分に影響することはないとなく、大学自身の改善と説明責任のために使われています。他にも香港やカナダもイギリスの方式を参考にした社会的インパクト評価を実施しています。

ここで一つ注意したいのは、オーストラリアでは Engagement and Impact

という名前からもわかるようにエンゲージメントが評価対象に入っており、オランダでは、インパクトとエンゲージメントを包含する societal relevance という概念を評価対象としています。これは、研究から生み出されたインパクトだけを評価するのではなくて、インパクトが出るまでの活動、これをオーストラリアではエンゲージメントと言っていますが、その部分も評価しようというものです。先ほど源先生のおっしゃっていた、インパクト評価においてはプロセスを見ることも必要という考えに近いと思います。

国立大学における社会的インパクト評価の導入

中野さんのイントロダクションでも触れられていましたが、国立大学法人運営費交付金の配分の中で社会的インパクト評価が実施されることが決定しました。スライド8ページの図の一番右上の「社会的インパクト評価」と書いているところです。中間・期末とあるのは、第4期の6年間のうちの4年目と6年目に評価を行うということです。社会的インパクト評価を実施することは、第3期中期目標期間中に決まりましたが、実際どのように評価を実施するかについては、第4期に入ってから文科省から通知するということになっていました。そして、2023年6月に「国立大学法人運営費交付金「ミッション実現戦略分の評価について（骨子）」という資料が出されました。この資料では、現時点における本経費の評価方法等のアウトラインが示され、具体的な評価方法など検討が必要な事項については2023年度中に改めて示すと書かれていました。その部分については、2024年3月に事務連絡という形で、検討結果が示されました。

2023年6月の資料には「各大学が社会的なインパクトを創出するために効果的な取り組みを分析し、その戦略的な強化に取り組むことを後押しする仕組みとして「ミッション実現戦略分」を導入した」と書かれています。そしてその評価が第4期の4年目終了時および期末となる6年目終了時に実施されます。2024年度が3年目なので、2025年度末には、実際に社会的インパクト評価を実施することになっており、その評価結果と期末の評価結果が第5期の運営費交付金の配分額に反映されることが決まっています。実際の資料でも下線で強

調されていますが、「各大学が自身のミッションを踏まえた、強み・特色ある分野を中心に創出された社会的インパクトを評価する」ことになっています（スライド 11 ページ）。評価については、文科省内で REF を参考とした検討を行ってきたので、基本的には REF を参考にしつつも、ミッション実現戦略分の経費の趣旨に沿った評価を行うことができるよう検討する、と書かれています。

ここに、REF を参考にしつつ書かれていますので、REF と日本の評価方法を実際に並べて相違点を見てみたいと思います（スライド 12 ページ）。定義は先ほど触れましたが、日本の方は、「我が国社会の公共財として」という文言が入っているのが異なる点です。次にインパクトの領域、インパクトの種類、インパクトの到達範囲・重要性の指標を見てみると、REF では、インパクトの領域は 9 種類、インパクトの種類は 134 種類が例示されています。インパクトの到達範囲・重要性の指標は、100 種類が例示されていますが、これはあくまでも例示で、これ以外のものも提出することは可能です。日本の方は、最初の通知では後ほど検討して報告するということでしたが、2024 年 3 月の通知の方には書かれており、これは後で説明します。

他の大きな違いとして、イギリスは Research Excellence Framework と書かれているように、研究の社会的インパクトのみを対象としていることに対して、日本の国立大学の社会的インパクト評価は、大学の生み出す社会的インパクトの評価であり、教育を含むと書かれています（スライド 13 ページ）。ただ、教育の社会的インパクトをどう評価するのかについては今のところ具体的には示されていません。そのため、教育の社会的インパクトをケーススタディとして提出する場合にどうすべきかはまだ不明です。また、インパクトの基になった教育研究活動の時期にも違いがあります。インパクトの基になっている研究については、REF は 2000 年から 2020 年と書かれており、REF2021 の提出期間から大体 20 年遡った研究までが対象であり、それ以前の研究は対象外になります。日本の方は、第 4 期以前から取り組んでいるものも含む、と記載されており、どこまで遡ってよいのかについては、今のところ記載されていません。次に、実際の提出書類への記載事項については REF も日本も①から⑤

で項目立てされています。しかし、日本の方の項目④「大学のミッションと創出されたインパクトとの関係性」という項目はREFにはありません。ミッション実現戦略分という予算の趣旨から、まず大学のミッションを記載した上で、それがどう社会的インパクトとつながっているのかを書かないといけないというのが日本の特徴と言えます。もう一つ重要な相違点として、提出するインパクトケーススタディの数が挙げられます。REF2021の場合は6,781件のケーススタディが提出されており、1大学あたり平均で43件、オックスフォード大学やケンブリッジ大学のように大きな大学になると100件以上のケーススタディが提出されています。日本では、REFと比べて厳選されたものになると書かれており、2024年3月の通知では常勤教員数が500人以下の大学は最大3件、500人以上の大学は500人追加ごとに1件加算するとなっており、最大の東京大学でも12件の提出で済むことになっています。日本全体でも最大346件なので、イギリスと比較すると20分の1ぐらいになり、規模がかなり異なります。評価の観点についても、先ほど触れたとおり、大学のミッションと社会的インパクトとの関係性が重要になっているのがREFと違う点です。評点については、どちらも0点、1点、2点、3点、4点の5段階で評価されます。その他に、REFでは、オーストラリアやオランダのように研究環境もインパクトをもたらすための重要なバックグラウンドと捉えて評価するのに対し、日本はインパクトのみを評価し、インパクト創出に向けた取り組みや環境については評価対象としないことになっています。

国立大学の社会的インパクト評価について、2024年3月の通知では、インパクトの領域、インパクトの種類、到達範囲と重要性がリストとして例示されています（スライド16ページ）。インパクトを与える領域の例についてはREFと同じものをそのまま持ってきたわけではなく、これまでも実施されている国立大学法人評価の「学部・研究科等の現況分析（研究業績水準判定）」で設定されている領域を使用しています。そのため、REFとはズレがあるのが現状です。また「本リストはあくまで例示であり、各大学が本リストから領域や指標等を選択することを想定したものではない」と付記されています。提出様式のアウトラインも示されており、先述のとおり④で大学のミッションと

創出されたインパクトとの関係性を記載することが決まっています（スライド 17 ページ）。

ここまで、第4期に実施される国立大学の社会的インパクト評価について、注意すべき点を中心に紹介しました。実際に評価に対応する国立大学の執行部や評価担当者の方々は、REF では大学のミッションとの関連性は問われないため、その点について REF を参考にすることができないことを理解しながら、どのように大学のミッションと各大学が生み出した社会的インパクトを関連付けるのかを検討しておく必要があるでしょう。さらに、もう一つ、ケーススタディの提出単位の問題が出てくる可能性があります。日本では各大学が主体になっているので、実際にどのレベル、例えば、研究プロジェクトや学部を提出単位として出すのか、それとも大学を提出単位として出すのか、このあたりの設定によってケーススタディの書き方も変わってくるため、検討の必要があると思います。また、適切なケースとエビデンスの選択についても、やはり難しいと思います。さらに、REF と比較してケースの提出数がかかなり少なく、東大でも十数件だと考えると、学内でも非常に目立っている研究や、社会的インパクトのエビデンスが示しやすい研究がピックアップされることが予測でき、そのような研究に関わっていない研究者の研究がネガティブに評価されるという悪影響が出てくることも懸念点として挙げられます。最後に、このミッション実現戦略分の枠組みによる運営費交付金の傾斜配分がどの程度になるのかも不明なため、大学の執行部にとっては、この評価にどれぐらいリソースを割いて注力すべきなのか難しい判断を迫られることが予想されます。

次に、今回の社会的インパクト評価の導入について政策的な目的を考えてみたいと思います。先ほどの文科省の書類にも書かれていたように、国立大学自体を変えていかないといけないという問題意識に基づいて、運営費交付金の中の「ミッション実現戦略分」での社会的インパクト評価を実施するという政策が導入されたと考えられます。しかし、現状の仕組みでは提出するケース数が少なく、大学の中の一部の関係者だけがこの評価のことを知っており、それ以外はやっていること自体も知らないという状況が起こる可能性があります。そうすると、大学全体で取り組む必要性が低いと捉えられることになり、国立大

学全体の意識改革につなげるのは難しいのではないかと思います。では、REFのように、ケースの提出数を増やせば大学全体として取り組むことにつながるのではないかという考え方もあると思いますが、REFは実施に予算がかかりすぎていることが常に問題点として挙げられており、日本での社会的インパクト評価の実施においても、この辺りの必要性和重要性のバランスを検討する必要があります。

また、その他の論点として、研究にはネガティブなインパクトというものも存在しますが、今回の評価では、その点については言及がありません。REFも同様にポジティブなインパクトのみを書くというシステムなのですが、ELSIやRRIなどの議論の中でも触れられるように、研究は社会に対してネガティブなインパクトを生み出す可能性もあるため、その点も大学や研究者は忘れてはいけなideでしょう。また、先ほど源先生も触れていらっしゃいましたが、このような新たな評価制度の導入によって、評価のゲーム化の加速や、いわゆる「測りすぎ」のような問題が常に起こりうる可能性があるため、その点にも考慮が必要でしょう。

評価学における社会的インパクト評価との相違点

ここからは、評価学と大学評価における社会的インパクト評価の相違点についてお話しします（スライド19ページ）。

〈研究評価の課題〉

まず前提として、研究評価の課題についてまとめて確認します。現在の研究評価の目的は多義的になっています。研究評価は、研究の質を保証し高めるために、研究者や研究機関がお互いに論文を査読（ピアレビュー）したところから始まりました。そこから、研究評価結果が資源配分に使われるようになり、外部から資金が配分されるようになると、説明責任が求められるようになってきました。さらに、最近は様々な機関で大学のランキング化が行われており、ここでも研究評価が行われています。

また研究評価を考えると、研究活動の不確実性も考慮する必要があります。

す。研究活動をロジックモデルとして描く際には、インプットとしてのヒト・モノ・カネから始まり、プロセスとしての研究活動を実施することで、アウトプットとしての論文や図書といった研究成果が出ると描くのが一般的ですが、このような直線的なロジックモデルに基づいて実際に研究が進んでいくことは稀です。そうすると、研究活動の不確実性をどの程度考慮すべきかという点は重要な論点になります。さらに、近年、特に大学ランキングなどでは、英語論文の数と引用数に基づいて研究評価が行われることが多く、そのために質の低い論文を粗製したり、仲間内で互いに引用を行うことで引用数を増やすようなことが起こっており、研究活動自体が歪められるという問題が起こっています。それに対抗する活動として DORA (The Declaration on Research Assessment; サンフランシスコ宣言)、ライデン声明、さらに最近ですと CoARA (The Coalition for Advancing Research Assessment) という新しい団体の活動も開始され、Responsible Research Assessment (RRA) の重要性が発信されています。

また、研究評価については、因果関係の複雑性も存在します。先ほどのロジックモデルの話ともつながりますが、こうしたからこういう成果が出てきたということは、なかなか一つの因果関係で考えられることは少なく、複数の活動や資金を考慮して因果関係を検討する必要があります。さらに、研究成果が出るまでの時間的な問題も存在します。私は、人文系の研究機関にいますが、人文系の研究、特に歴史学や日本文学などでは、図書の出版が最も重要な研究成果だと考える研究者も多く、一生をかけて大著を一冊書くことが重要であり、それによって研究者として大成したと認められるということもあると聞きます。国立大学法人評価は6年、その他の研究評価でも5年や長くて10年ぐらいのタイムスパンで評価がされることが多いですが、ある研究者が大著を準備している期間に論文など他の成果を出していないと、研究活動をしていないように見えてしまいます。最後に、これは評価学でも同様ですが、研究評価人材が不足しているという点も課題として挙げられます。

〈評価学におけるインパクトの定義と対象、評価方法〉

次に、評価学におけるインパクトの定義をみていきます。スライド20ページの図は評価学の佐々木先生がインパクトについて描かれたものです。これを見ると、評価学の中で同じインパクトという言葉を使っている、その意味に広がりがあることがわかると思います。先程の源先生のお話にあったインパクトはここでいう Type III、つまり、介入行為による純粋な変化量ということになります。一方、国立大学法人の社会的インパクト評価の枠組みでの社会的インパクトは、ここでいう Type II のインパクト、つまり間接的な効果に近いと考えています。

次に、評価学の中でもプログラム評価的に考える社会的インパクトと、研究における社会的インパクトとの違いについて説明します。プログラム評価の場合、ある目的を設定したうえで、その目的を実現するために主体が介入していくので、ロジックモデルが比較的使いやすい。一方、研究評価の場合、多くの研究者は研究を実施する際に社会的インパクトの創出を最重要の目的として設定していません。基礎研究であれば新たな知識の獲得、応用研究であれば応用方法の探求、開発研究であれば製品開発が最重要の目的として設定され、その先はなかなか想定しづらいため、研究開始の段階で社会的インパクト創出に向けたロジックモデルを描くことに研究者がまだ慣れていないのが現状だと思います。

次に、評価方法の違いについてです。源先生のご講演にもあったエビデンス・ランクの図をご覧ください（スライド23ページ）。研究の社会的インパクト評価を実際に行う際に、この図の上にあるような RCT やシステマティック・レビューを実施することはほぼ不可能で、おそらく一番下の専門家の意見やケース研究しかできません。評価対象の特性として、これは仕方がないことだと思いますし、イギリスの REF の評価でもインパクトが出た事例についてケーススタディとして記述的なエビデンスが提出され、それをピアレビューによって評価するという形で実施されています。このやり方もエビデンス・ランクの表の中では下の方のエビデンスに当たります。このように専門家の意見やケース研究によって研究の社会的インパクトの評価を実施していることについて、評価学的にはどう考えるのかを知りたいとも思いますが、先程の源先生の

お話では、あるエビデンスがエビデンス・ランクの上位であるから良いということでもないとのことでしたので、現状は研究の社会的インパクト評価は専門家によるピアレビューで実施せざるを得ないと考えています。

〈何をインパクトと捉えるか〉

次に何をインパクトと捉えるのかについて、プログラム評価の場合は活動の前に起こすべきインパクトを考える必要があることから、ある程度明確に設定できます。ただし、実際にロジックモデルを描く際には、アウトカムとインパクトの切り分けが結構曖昧になるという課題も存在します。

それに対して、研究評価の場合は社会的インパクトの創出を研究開始時に想定しない研究も多く、研究ごと、特に分野ごとに社会的インパクトをどのように捉えているのかもまちまちです。REF2021 で提出されたケーススタディをまとめた表を見ると、社会・技術・文化・健康・環境・経済・法律・政治というインパクトの型に対して、どのような分野の研究からそれらのインパクトが創出されたかがわかります（スライド 26 ページ）。これを見ると、社会科学と人文科学が、社会や文化、環境に対するインパクトの創出に貢献しており、また、経済や健康など、一見、定量的なエビデンスを出しやすいように見えるところにケースが集中しているわけではなく、社会や文化のようにエビデンスが出しづらいように思えるところも重要だと考えられて、各大学がケースを提出しているように見えます。

2023 年に日本学術会議の研究評価分科会が、日本の研究者は何を社会的インパクトと考えているのかについて調査するために、人文・社会科学系の研究者を対象にインタビューを実施し、そのインタビュー内容からインパクトの類型が抽出されました。スライド 27 ページに記載した 1 から 13 がその類型になります。参考になる資料であるとは思いますが、これもやはり一例であり、インタビュー対象者の数を増やせば、さらに異なる類型が出てくるのではないかと考えています。

社会的インパクト評価は、日本評価学会の中でも一致した見解があるわけではなく、今田克司先生がその点に問題意識を持たれたことから、2022 年秋に

日本評価学会の中に社会的インパクト評価分科会が発足しました。私も2023年の秋ごろから参加しています。現在、分科会では、「社会的インパクト評価に関する現状整理」を作成しています。これについてはもうすぐ公表される予定なので、また見ていただければと思います。その中では、経済側、多くは私企業から始まった流れと公共側であるニュー・パブリック・マネジメントの二つの流れのなかで社会的インパクトの考えが発展してきたということが整理されており、見てもらえれば、これまでの動向についての理解が深まると思います。また、2024年12月に行われる日本評価学会の全国大会でも、「社会的インパクト評価」に関するラウンドテーブルが今田先生を中心に企画されており、現状整理についての議論が行われますので、もしご興味あればそちらも参加していただければと思っています。

評価学の考え方や経験の活用

これまで蓄積されてきた評価学の考え方や経験を、大学評価や研究評価にどのように活用できるのかを考えてみると、「評価は評価対象の価値を引き出すものである」という基本に戻り、大学評価や研究評価を考え直すことが必要だろうと考えています。第4期の国立大学の社会的インパクト評価の際には、大学のミッションとどうつながるのかを説明する必要があります。そうすると、大学のミッションの実現を最終的な目標に置いた上で、プログラム評価やロジックモデルの考え方を使いながら、大学で実施されている個別の活動のうち、どのような活動がミッションの実現に結びつくのかということを考える必要があります。本来なら、自分の大学のミッションはこういうものであり、その実現のためにどのような活動が必要かということを考えるのがあるべき順序ですが、すでに第4期も開始し、研究や教育も始まっているため、後追いの設計にならざるを得ないのではないかと思います。また、先述のとおり、評価手法やエビデンスとしてシステマティック・レビューやRCTのような実験的な評価デザインは大学評価や研究評価に使うことはほぼ不可能ですが、一方で、大学や研究評価において、先ほどのエビデンス・ランクのうちどの程度まで厳密な手段が必要なのかについては今後も議論が必要な点ではないかと考えてい

ます。他には評価学における参加型／協働型評価という考え方は、REF やオランダの SEP におけるインパクトを生み出す環境やエンゲージメントという考え方に近い考え方で、評価を行うことそれ自体によって関係者に変化をもたらそうというものです。日本の大学の社会的インパクト評価も、このように参加者や関係者への変化をもたらすような方向性になることが望ましいと考えています。また日本でも、社会的インパクトのみを評価するのではなく、REF や SEP のようにそのようなインパクトを起こすための環境に対する評価も、今後実施するのが望ましいと考えています。

一つ、個人的な感想として、芸術文化領域の社会的インパクトの議論は、研究評価と同じような構造、つまり内在的な価値と外在的な価値を持つように思われる、とスライドに書きました（スライド 30 ページ）。人文・社会科学系の研究は、一人一人の考え方や行動変容などにどれぐらい大きな影響を与えられるか、ということが重要な目的の一つとして考えられますが、その点は研究評価ではあまり議論されていないため、芸術文化領域の評価と人社系の研究評価は、もしかしたら今後つなげて議論できる可能性があるのではないかと考えています。

まとめ

国立大学の社会的インパクト評価が、第 4 期から始まることが決まっています。社会からの様々な要請に基づいて、大学が社会的インパクトを創出することは世界的に求められており、イギリスやオランダなどでは実践が進んでいます。評価学のプログラム評価と比較すると、大学や研究の社会的インパクト評価はインパクトを与える対象との関係性が曖昧で、ロジックモデルを想定するのが難しく、評価方法も限定されています。さらに、研究者が想定する社会的インパクトも分野やその研究者のキャリアなどによってかなり異なります。

評価学的な観点と大学評価における観点との相違点を意識しながら、評価学的な知見を活用することで、より良い大学の社会的インパクトの実践につながるのではないかとということで、今回の源先生と私の話をまとめとさせていただきます。ありがとうございました。

大学における社会的インパクト評価 と評価学的アプローチの接続

2024/10/9

第19回JINSHA情報共有会

北海道大学

人間文化研究機構 国文学研究資料館

特任准教授

押海圭一

oshiumi.keiichi@nijl.ac.jp

目次

1. 自己紹介
2. 大学評価 における社会的インパクト評価
3. 日本の国立大学法人における社会的インパクト評価の導入
4. 評価学における社会的インパクト評価との相違
5. 評価学の考え方や経験の活用
6. まとめ

1. 自己紹介

【学歴】

早稲田大学文学部卒。京都大学法科大学院修了。政策研究大学院大学科学技術イノベーション政策プログラム博士後期課程在学中（研究テーマは「研究評価」）

【職歴】

- 2011年5月ー2019年3月 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 総合地球環境学研究所
非常勤事務職員として入職。2015年7月から2019年3月までInstitutional Research室の特任専門職員としてIR・研究評価、法人評価や中期計画中期目標関係業務を担当
2016年に日本評価士学会認定評価士資格を取得
- 2019年4月ー2020年3月 国立大学法人 琉球大学
研究推進機構・研究企画室にて主任リサーチ・アドミニストレーターとして研究費獲得支援（プレアワード）、研究プロジェクトマネジメント（ポストアワード）、研究IRなどを担当
- 2020年4月ー2024年3月 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構本部
機構長戦略室にて評価・IR担当特任助教として法人評価・IR業務全般を担当
- 2024年4月ー現在 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国文学研究資料館
研究部に所属し、人文学系研究評価研究および館のIRを担当

3

2. 大学評価における社会的インパクト

背景

- 大学に対する社会からの要請の変化
 - New Public Managementに基づく行政サービスの質の向上と説明責任の要求
 - 高等教育の場だけではなく、研究・イノベーション、産業振興、地域振興などの政策との関連付け
 - 大学が教育や研究の場以上の役割を求められている
- 研究に対する社会からの要請の変化
 - 発展する科学技術に対する不信感（戦争、環境破壊、エネルギー、ゲノム）
 - 解決すべき社会課題の複雑化（cf. モード2、TD研究）
 - 上記の要請に応えるためにELSI(Ethical, Legal and Social Issues)からRRI(Responsible Research and Innovation)へ

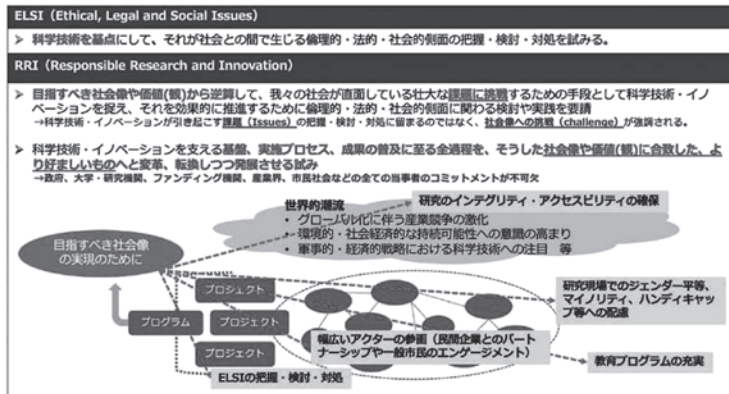
4

2. 大学評価における社会的インパクト

背景

Box. 1-2

ELSIからRRIへ



出典：国立研究開発法人科学技術振興機構 研究開発戦略センター(2021)

5

2. 大学評価における社会的インパクト

社会的インパクトの定義

Impact was defined as 'an effect on, change or benefit to the economy, society, culture, public policy or services, health, the environment or quality of life, beyond academia'. (学術界を超えた、経済、社会、文化、公共政策・サービス、健康、環境、生活の質への影響、変化、利益)

REF2021

Research impact is the contribution that research makes to the economy, society, environment or culture, beyond the contribution to academic research. (研究インパクトとは、学術研究への貢献を超えて、研究が経済、社会、環境、文化に与える貢献のこと)

Australian Research Council

Cultural, economic, industrial, ecological or social changes that are (partly) the result of research-generated knowledge and skills. (研究によって生み出された知識や技能の(部分的な)結果としての文化的、経済的、産業的、生態学的、社会的な変化)

The Dutch Research Council (NWO)

国立大学が、我が国社会の公共財として、学術的な価値だけでなく、社会、経済、国民生活等の進歩に与えた影響

文科省 (R5.6.19通知)

6

国	取組名	実施主体	資金配分への活用	特徴	DB
イギリス	Research Excellence Framework(REF)	Research England (UK Research and Innovationの一部門)	あり	インパクトをもたらすための「環境 (Environment)」も評価	REF 2014 https://results.ref.ac.uk/5aou32tjxsa1k4f3rkwtgyul/ REF2021 https://results2021.ref.ac.uk/impact
オーストラリア	Engagement and Impact Assessment (E&I)	Australian Research Council(ARC)	2016年までは資金配分に利用	Engagementも評価	https://dataportal.arc.gov.au/EI/Web/Impact/ImpactStudies
オランダ	Strategy Evaluation Protocol(SEP)	NWO KNAW (オランダ王立芸術科学アカデミー)	なし (大学自身の改善と説明責任のため)	Societal relevance を評価	なし

- ### 3.国立大学における社会的インパクト評価の導入

[illegible]

8

3.国立大学における社会的インパクト評価の導入

社会的インパクト評価の導入

第3期中期目標期間（2016年～2021年度）中に、第4期（2022～2027年度）の国立大学運営費交付金の構成において、各大学が社会的なインパクトを創出するために効果的な取組を分析し、その戦略的な強化に取り組むことを後押しする仕組みとして「ミッション実現戦略分」を導入し、社会的インパクト評価を実施することを決定。具体的な評価方法等については、第4期に入ってから検討し通知することとなっていた。

第4期中期目標期間に入り、以下の通知等が発出

- 2023年6月19日「国立大学法人運営費交付金「ミッション実現戦略分」の評価について（骨子）」
 - 第4期における社会的インパクト評価を実施する経緯、実施方法の概要について記載
- 2024年3月27日事務連絡「国立大学法人運営費交付金「ミッション実現戦略分」について」
 - 上記通知で更なる検討が必要とされていた事項について追加的に記載

9

3.国立大学における社会的インパクト評価の導入

社会的インパクト評価の導入

2023年6月19日「国立大学法人運営費交付金「ミッション実現戦略分」の評価について（骨子）」

- ミッション実現戦略分の概要

国立大学法人の第4期中期目標期間（令和4～9年度）には、第3期の運営費交付金における「3つの重点支援の枠組み」により強化してきた機能を基に、我が国最大の知的インフラである国立大学が、我が国社会の公共財として、学術的な価値だけでなく、社会、経済、国民生活等の進歩にどれだけ影響を与えることができるかということを国民・社会に説明して理解を得ていく必要があり、こうした認識が、今後、国立大学のあらゆる分野にわたって共有されるようにならなければならない。

すべての国立大学における速やかな改革意識の浸透を助勢するため、第4期中期目標期間の運営費交付金において、**各大学が社会的なインパクトを創出するために効果的な取組を分析し、その戦略的な強化に取り組むことを後押しする仕組みとして「ミッション実現戦略分」を導入した。**

※3つの重点支援の枠組みとは、第3期に導入された仕組みで、国立大学がそれぞれの特性に応じて①地域貢献型、②特色型、③卓越研究型の3つを選び、それぞれの枠組みで活動を評価する仕組み。

10

3.国立大学における社会的インパクト評価の導入

社会的インパクト評価の導入

2023年6月19日「国立大学法人運営費交付金「ミッション実現戦略分」の評価について（骨子）」

- 本経費の支援期間と評価対象

本経費による支援は6年間の中期目標期間を通じて継続して行い、中間（4年目終了時）及び期末（6年目終了時）に各大学が創出した社会的なインパクトを評価することとし、その評価結果を第5期に向けて反映する。

本経費は各国立大学が担うミッションの実現・加速化に資する経費として、運営費交付金のミッション実現加速化経費に位置付けられていることから、各大学が自身のミッションを踏まえた、強み・特色ある分野を中心に創出された社会的インパクトを評価する。

社会的インパクトの評価については、本経費が「第4期中期目標期間における運営費交付金の在り方についての検討会」及びその後の予算編成においても、英国が2014年に開始したREF（Research Excellence Framework）を参考とした検討を行ってきたことから、その仕組みはREFを参考としつつも、本経費の趣旨に沿った評価を行うことができるよう、検討を行う。

11

3.国立大学における社会的インパクト評価の導入

評価手法の公開状況(REFとの比較)

	REF2021	日本
インパクトの定義	学術界を超えた、経済、社会、文化、公共政策・サービス、健康、環境、生活の質への影響変化、利益	国立大学が、我が国社会の公共財として、学術的な価値だけでなく、社会、経済、国民生活等の進歩に与えた影響
インパクトの領域	Areas of impactとして、以下の9つを例示 • 人の健康と福祉、動物福祉へのインパクト • 創造性、文化、社会へのインパクト • 社会福祉へのインパクト • 商業・経済へのインパクト • 公共政策、法律、サービスへのインパクト • 生産へのインパクト • プロフェッショナル・サービスの実践・提供、パフォーマンス向上、倫理実践へのインパクト • 環境へのインパクト • 理解、学習、参加へのインパクト	インパクトの領域、種類、エビデンスや指標等を検討し、各大学へ例示することとする。 →2024年3月27日に通知（後述）
インパクトの種類	インパクトの領域ごとにインパクトの種類を例示（合計134種類）	
インパクトの到達範囲、重要性の指標	インパクトの領域ごとに到達範囲、重要性の指標を例示（合計100種類）	

12

3.国立大学における社会的インパクト評価の導入

評価手法の公開状況(REFとの比較)

	REF2021	日本
教育を含むか	含まない（教育面は「TEF : Teaching Excellence and Student Outcomes Framework」で評価）	含む（評価方法は新たに検討予定）
インパクトの 発現タイミング	アウトプットは2014年1月1日～2020年12月31日までに生じたもの。 インパクトは2013年8月1日～2020年7月31日までに生じたもの。 ※REF2021は2020年11月27日に書類提出締切	R4(2022)～R9(2027)年（第4期中期目標期間）に生じたインパクト。
基となる教育研究活動の時期	インパクトを生み出した研究は2000年1月1日～2020年12月31日までにを行ったもの。	第4期以前から取り組んでいるものを含む（期限なし）
記載事項	1. Summary of the impact 2. Underpinning research 3. References to the research 4. Details of the impact 5. Sources to corroborate the impact	1. <u>タイトル</u> 2. 社会的インパクトの概要 3. 社会的インパクトの範囲、重要性 4. <u>大学のミッションと創出されたインパクトの関係性</u> 5. 社会的インパクトの根拠
評価対象の数	学部・学科等を評価単位とし、160人以上の学部・学科の場合50人に1件あたりのインパクトケーススタディ書類の提出を求める。 (REF2021では157大学が6,781件のケーススタディを提出（1大学当たり43件）)	REFと比べて厳選されたものとし、提出するケーススタディの最低件数を定める。常勤教員数を基に、500人以下の大学は最大3件、500人以上の大学は500人毎に1件加算（国立大学86校から <u>全体で最大346件</u> が提出される見込み）。最大の東京大学で12件。

13

3.国立大学における社会的インパクト評価の導入

評価手法の公開状況(REFとの比較)

	REF2021	日本
評価の観点	提出された社会的インパクトケーススタディを各分野の専門家が範囲(reach)と重要性(significance)の観点から5段階評価し、上位2段階の評価を得たものの割合を各大学の資金配分のウェイト付けに利用	- 社会的インパクトの範囲、重要性(REFと同様の観点) <u>各大学のミッションと、創出された社会的インパクトの関係性</u> - インパクトを説明する判断根拠は明確であるか。(判断根拠は、指標やステークホルダーからの評価等を想定)
評点	Four star: 影響範囲と重要性の点で傑出したインパクト Three star: 影響範囲と重要性の点で非常に大きなインパクト Two star: 影響範囲と重要性の点で、かなりのインパクト One star: 認識はできるが、影響範囲と重要性において控えめなインパクト Unclassified: インパクトの影響範囲と意義がほとんどない、またはまったくない。もしくは、そのインパクトが、提出されたユニットによって生み出された優れた研究に裏打ちされていない。	4:特筆すべき顕著な社会的インパクトを与えている 3:非常に大きな社会的インパクトを与えている 2:大きな社会的インパクトを与えている 1:社会的インパクトを与えているが、限定的である 0:社会的インパクトを与えた範囲、重要性の確認が困難
その他	各申請ユニットにおいて研究を支援し、インパクトをもたらすための「環境(Environment)」を「活力」と「持続可能性」という2つの基準で評価。全体の15%を占める。 ※配分は研究成果65%、インパクト20%、環境15%	評価は原則として創出された社会的インパクトを評価するものであることから、インパクト創出に向けた取組の状況については、評価の対象とはしない。

14

3.国立大学における社会的インパクト評価の導入

評価手法の公開状況（2024年3月27日通知）

ミッション実現戦略分（骨子）における検討事項 ②指標等の例示（1/2）



インパクトの領域、種類、エビデンスや指標等を検討し各大学へ例示（R5年度中）

- 研究の例示は英国のREF2021を参考に検討。教育の例示は新たに検討
- 領域設定は、SDGs等、世界が直面する課題を意識したものとして、社会変革・地方創生の駆動力としての役割をより意識できる仕組みとする
- REF2021では、9つの「インパクトの領域」、134の「インパクトの種類」、100の「到達範囲と重要性」が提供可能な例示リストとして示されている。
- 例示リストは「各分野の研究によってもたらされる影響が、地域、国内、そして国際的に、個人やコミュニティの生活の質にプラスの影響を与えると考えられる、多種多様な分野を例示するためのもの」「これらはいくまでも指標であり、実際には多くのインパクトがこれらの境界を越えるか、境界を越えている」とされている。
- また、「ケーススタディは、提出ユニットによって例示リストのように分類されることは期待されていない」とされ、例示リストからインパクトの領域や種類、指標を選び取るような形式にはなっていない。
- REF2021における例示リストは、学科・専攻や研究グループなどが実質的な提出単位となる中、ケーススタディ作成を行う多くの研究者に対し、インパクトを与える分野の多様性を例示するために活用されている。
- 一方、「ミッション実現戦略分」は、各大学が有する全ての分野を網羅するものではなく、各大学自身のミッションを踏まえ、強み・特色ある分野を中心に創出された社会的インパクトを評価するものであることから、評価対象となる社会的インパクトの数は厳選しており、提出単位は各大学となる。このことを踏まえ、次ページのとおり例示リストを作成。

出典：文部科学省（2024）

15

3.国立大学における社会的インパクト評価の導入

評価手法の公開状況（2024年3月27日通知）

ミッション実現戦略分（骨子）における検討事項 ②指標等の例示（2/2）



インパクトを与える領域の例	受益者の例	インパクトの種類等の例	インパクトを与えた範囲や重要性を示すエビデンス・指標等の例
国際社会への寄与	国際社会 地域社会 政府 地方公共団体 患者 学生 市民 個人 団体 企業 国際機関 学術機関 等	・課題解決への貢献 ・価値観の形成・変化、意識の向上 ・受益者の行動変容 ・関心・関与の喚起、向上 ・政策や規制・ガイドライン・基準等への貢献 ・意思決定への影響 （政策の実践や強化、中止、見直し等）	・ステークホルダーからの評価 ・影響を受ける人数の増減 ・政策文書への反映 ・基準等の変更 ・受賞
地域社会への寄与		・効果的手法の確立、変化 ・公共サービス提供方法の変更 ・サービスへのアクセスの改善 ・環境面やエネルギー面での効果	・メディアでの評価 ・新聞、雑誌、テレビ等での書評・紹介 ・ライセンズ、製品化等の状況
政策形成への寄与		・自然環境に与える影響 ・技術移転等による実用化、製品化 ・産業 ・生産性の向上	・測定、解析結果 ・収入の増加、コストの減、費用対効果の分析結果
診療・福祉の改善への寄与		・新たな概念の創出 ・慣行への影響（変化・停止） ・患者理解の促進 ・コストの削減	・国内外への影響 ・市場規模の拡大への貢献 ・市場での認可
社会インフラの強化		・高度な人材の活躍 ・社会課題解決のための大胆な組織転換	・書籍の出版部数、教科書としての利用状況、図書館部等での所蔵数 等
新産業基盤の創出			
地球環境・資源の保全への寄与			
新しい文化創造への寄与			
専門職の高度化への寄与			

- 「インパクトを与える領域の例」は、国立大学法人評価の「学部・研究科等の現状分析（研究業績水準判定）」で用いている領域等を参考に設定。
- また、「ミッション実現戦略分」は、SDGs等、我が国のみならず広く社会が直面する課題を意識できる仕組みとする必要があることから、各大学が提出する様式においても、広く社会が直面する課題への貢献を意識した記載を求める。
- 本リストはいくまでも例示であり、各大学が本リストから領域や指標等を選択することを想定したものであるではない。

出典：文部科学省（2024）

16

3.国立大学における社会的インパクト評価の導入

評価手法の公開状況（2024年3月27日通知）

ミッション実現戦略分(骨子) における検討事項 ③記載事項・提出資料のアウトライン（2/2）

- 提出モード** 1件につき、数枚程度を想定 ※提出資料は公表することを想定
- アウトライン** 記載事項は、おおむね以下の観点で構成する

①タイトル	
②社会的インパクトの概要 当該インパクトが創出した社会における価値や意義について記載 ポイント：広く社会が直面する課題に対する大学の貢献をわかりやすく記載すること	例示リストと記載の対応イメージ 領域の例 : 受益者の例 : インパクトの種類別の例 : エビデンス・指標の例 :
③社会的インパクトの範囲、重要性 ステークホルダーの設定やその評価について記載 ポイント：インパクトを与えた範囲（ステークホルダー）や、そのインパクトがステークホルダーにとってどの程度重要なものかわかりやすく記載すること	例示リストと記載の対応イメージ 領域の例 : 受益者の例 : インパクトの種類別の例 : エビデンス・指標の例 :
④大学のミッションと創出されたインパクトの関係性 大学のミッションとインパクトの関連性を記載	
⑤社会的インパクトの根拠 土台となる教育研究活動や法人運営、関連する文献、証拠となる資料等 ポイント：創出されたインパクトの範囲、重要性を客観的に記載すること	例示リストと記載の対応イメージ 領域の例 : 受益者の例 : インパクトの種類別の例 : エビデンス・指標の例 :

出典：文部科学省（2024）

17

3.国立大学における社会的インパクト評価の導入

気にしておくべき点

- 大学から見ると
 - REFにはない大学のミッションとの関連付けをどのように行うか。
 - 提出単位が学部や研究プロジェクトではなく、各大学となっているため、どの程度の枠組み・規模の事例を出すべきか。
 - 適切なケースを選び、適切なエビデンスを示していくことの困難さ。
 - REFと比較してケースの提出数が少ない（10分の1程度）ため、目立つ研究やエビデンスが示しやすい研究がピックアップされ、そうではない研究・研究者にとってはマイナス。
 - ミッション実現戦略分による傾斜配分がどの程度になるか不明。
- 政策面
 - ケースの提出数が少なく、大学全体で取り組む必要性が低い場合、国立大学全体の意識改革を起こすのは難しいのでは。（ただし、REFは実施に巨額の費用がかかっていることにも注意）
- その他
 - 研究にはネガティブなインパクト（cf. “Grimptact”（Derrick, et.al.2021））も存在するが、その点についての言及がない。
 - 評価そのものの持つ影響にも考慮が必要。（「ゲーム化」、「測りすぎ」）

18

4. 評価学における社会的インパクト評価との相違点

研究評価の課題

➤ 目的の多義性

方向性	誰が？	何のために？	誰のために？	具体例
内向き	- 研究者 - 各機関	- 研究活動の推進 - 適切な内部的資源配分	- 研究者自身 - 機関	- 論文査読 - 自己点検評価 - 教員評価 - プロジェクトマネジメント
外向き	- 各機関 - 外部機関（ランキング会社等）	- 外部からの資源配分 - アカウンタビリティ	外部ステークホルダー	- 国立大学法人評価 - 概算要求 - 大学ランキング

➤ 研究活動の不確実性

- 成果の過度の定量化による学術研究の歪み（対抗する活動としてDORA、ライデン声明なども存在）

➤ 因果関係の複雑性

➤ 研究成果が出るまでの時間的問題

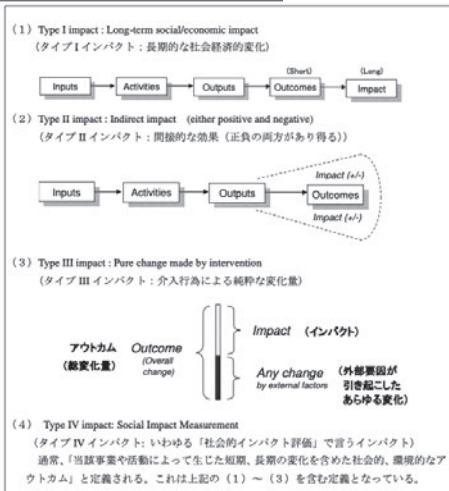
- 政策評価のタイムスパンと不適合

➤ 研究評価人材の不足

19

4. 評価学における社会的インパクト評価との相違点

評価学における定義



出典：佐々木 2023

20

- 佐々木の分類によると、「インパクト」には4種類の使い方がある。
- 大学評価における社会的インパクトは、佐々木の定義によると「タイプIIインパクト:間接的な効果」に近いものと考えられる。

4. 評価学における社会的インパクト評価との相違点

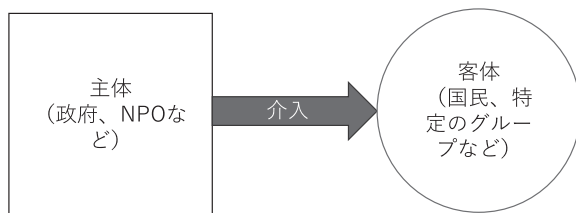
対象との関係性

・評価学（プログラム評価）の場合

主体（政府やNPOなど）は、特定の客体（国民、グループ）を設定し、「意図」を持って何らかの介入を行い客体の中での変化を起こそうとする。

主体と客体の間に明確な関係性がある。

→ロジックモデルを活用することが比較的容易



21

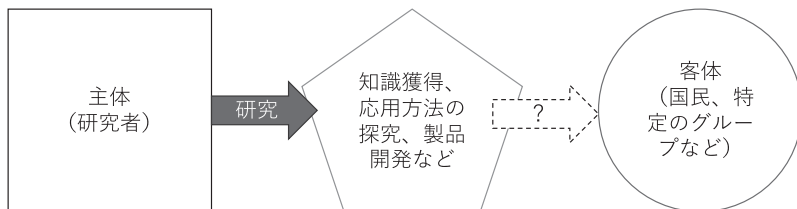
4. 評価学における社会的インパクト評価との相違点

対象との関係性

・研究評価の場合

主体（研究者）は、基礎研究、応用研究、開発研究など違いはあるが、新たな知識の獲得、応用方法の探究、新しい製品などの開発などを目的とし、特定の客体に影響を与えることを第一の目的としていない。（ただし、課題解決型研究、アクションリサーチなど客体との関係性が強いタイプ（「意図」を持った研究も増えつつある）

→インパクトに向けたロジックモデルを書き出すことが難しい



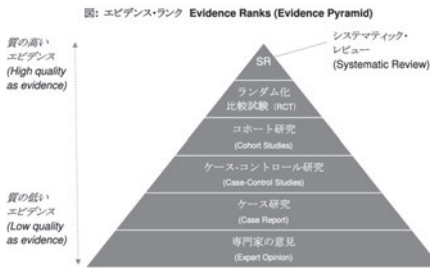
22

4. 評価学における社会的インパクト評価との相違点

評価方法の違い

• 評価学（プログラム評価）の場合

ランダム化比較デザイン、準実験デザイン、クロスセクションデザイン、時系列デザイン、パネルデザイン、事前・事後比較デザインなど、事例に合わせた評価デザインやエビデンスの選択可能性が高い。



出典：佐々木 2023

23

4. 評価学における社会的インパクト評価との相違点

評価方法の違い

• 研究評価の場合

主体と客体の関係性が不明瞭であり、介入との帰属性も薄いため、プログラム評価のように多様な評価方法やエビデンスを利用することが難しい。

➤ イギリスのREFやオーストラリアのE&Iにおいても、各大学から出された社会的インパクトの事例説明を専門家が評価するという、記述的なエビデンスに基づく専門家評価（ピアレビュー）によって実施されている。

24

4. 評価学における社会的インパクト評価との相違点

何をインパクトと捉えるか

• 評価学（プログラム評価）の場合

まず、活動の前に起こすべき社会的インパクトを想定するため、ある程度明確に設定できる。

ただし、アウトカムとインパクトの分類が不明瞭なようにも思われる。

• 研究評価の場合

社会的インパクトの創出を当初に想定しない研究も多く、研究者ごとに考える社会的インパクトもまちまち

25

4. 評価学における社会的インパクト評価との相違点

何をインパクトと捉えるか

• 研究評価の場合

インパクトの型	全体	人文科学	社会科学	生命科学	理工学
社会	2,469	628	1,356	316	169
技術	1,124	22	84	227	791
文化	940	816	95	5	24
健康	845	16	66	690	73
環境	464	14	152	129	169
経済	203	6	173	5	19
法律	171	15	125	21	10
政治	145	11	95	36	13
(小計)	6,361	1,528	2,146	1,419	1,268

全分野で提出されたインパクトの型と件数（小林2023）

REF2021で提出されたインパクトの類型に関する分析。

生命科学分野の健康への貢献や理工学分野の技術的な貢献など、社会的インパクトとして想定しやすいものもあるが、最も多く提出されているのが社会に対する貢献であり、そこへは人文科学や社会科学の分野からの貢献が大きいことは注目すべきである。

26

4. 評価学における社会的インパクト評価との相違点

何をインパクトと捉えるか

2023年に日本学術会議科学者委員会研究評価分科会によって、人文社会科学系研究者へ社会的インパクト評価についてのインタビュー調査を実施し、以下のインパクト類型を抽出

1. 社会課題に関する認識の喚起や新たな社会像の提示
2. 行政府等における政策形成プロセスへの参加を通じた議論の深化への貢献
3. 具体的な政策立案への寄与
4. 法制度の整備や司法への貢献
5. 行政府や産業で必要となる調査手法や調査基盤の深化への貢献
6. 国際関係の強化の支援
7. 専門的職業の高度化への寄与
8. 学校教育の改善への寄与
9. 市民の思考能力やスキルの向上
10. 社会や歴史についての市民の理解の醸成
11. 文化・歴史資料の収集・保全・展示による心の豊かさの涵養や新たな文化の形成
12. 地域コミュニティのアイデンティティの形成
13. 新たな産業の形成や商業的効果

出典：日本学術会議科学者委員会研究評価分科会（2023）

27

4. 評価学における社会的インパクト評価との相違点

評価学会内での議論

<背景>

- ここ5-6年の間に、「社会的インパクト評価」について取り上げられることが多くなってきたが、分野や論者によって定義や考え方に統一感、整合性が欠けている。「社会的インパクト評価」については、日本評価学会含め、分野横断的に総合的かつ体系的に検討する母体が存在していなかった。一方で、「社会的インパクト評価」が評価現場での混乱や評価のあるべき姿をゆがめるような事態も招来している。このような状況に鑑み、「社会的インパクト評価」について、日本評価学会としての概念整理を行うことによって、その適切な理解や応用の普及を試みたい。

28

4. 評価学における社会的インパクト評価との相違点

評価学会内での議論

<社会的インパクト評価分科会における議論>

- ・2022年秋の分科会発足以降、約1年半の議論をもとに、「社会的インパクト評価に関する現状整理」をここまでの議論のまとめとして公表する予定。
- ・今後、分科会では各分野における「社会的インパクト評価」の取り組みの現状分析、課題の共有などを通じて、取り組みの共通項等を抽出し、分科会としての「指針」等作成に向けた議論へと歩みを進めたい。
- ・2024年12月21日－22日開催の日本評価学会第25回全国大会@早稲田大学において、「社会的インパクト評価」に関するラウンドテーブルを企画。

29

5. 評価学の考え方や経験の活用

- ・「評価は評価対象の価値を引き出すものである」（源発表）という基本に戻り、大学評価や研究評価を考え直すことが必要。
- ・大学の社会的インパクト評価を考える際にミッションを最終目的に置いた上で、大学の活動と結びつけることが必要。その際にプログラム評価やロジックモデルの考え方が役立つ。
- ・体系的レビューやRCTなど実験的な評価デザインは大学評価や研究評価には使いづらいが、大学評価や研究評価でどの程度までの厳密な手法が必要か、という議論の端緒にはできる。
- ・参加型／協働型評価という考え方はREFやSEPにおけるインパクトを生み出す環境やエンゲージメントという考え方に近く、評価を行うことそれ自体で関係者に変化をもたらそうという方向性があり、日本の大学の社会的インパクト評価もそのような方向性が望ましいように思われる。
- ・芸術文化領域のインパクトの議論は研究評価と同じような構造（内在的価値＋外在的価値）を持つように思われる。

30

6.まとめ

- 日本の国立大学法人の評価において、社会的インパクト評価が導入されつつある。
- さまざまな社会からの要請によって、大学が社会的インパクトを創出することは世界的に求められており、イギリスやオランダなどでは評価の実践も進んでいる。
- 評価学（プログラム評価）と比較すると、大学の研究の社会的インパクト評価はインパクトを与える対象との関係性が曖昧であり、ロジックモデルを想定するのが難しく、評価方法も限定される。さらに、研究者が想定する社会的インパクトもまちまちである。
- 評価学的な観点と大学評価という観点の相違点を意識しながら、評価学的な知見を活用することでより良い大学の社会的インパクト評価の実践に繋がるのではないかな。

31

謝辞

本発表はJSPS科学研究費補助金（研究代表者：押海圭一、課題番号：23K00271）「研究評価システムが人文系研究者に与える影響に関する研究」の助成を受けたものです。

32

参考資料

- ・ 神里 達博. (2020). 社会は科学や技術とどこまで付き合うか：学問の分化と統合. 年報 公共政策学, 14, 13–27.
- ・ 国立研究開発法人科学技術振興機構 研究開発戦略センター. (2021). ELSIからRRIへの展開から考える科学技術・イノベーションの変革 政策・ファンディング・研究開発の横断的取り組みの強化に向けて (—The Beyond Disciplines Collection—)
- ・ REF2021, <https://www.ref.ac.uk/>, Research England, 2024年10月5日参照
- ・ Engagement and Impact Assessment, <https://www.arc.gov.au/evaluating-research/ei-assessment>, Australian Research Council, 2024年10月5日参照
- ・ VSNU, KNAW and NWO (2020). **Strategy Evaluation Protocol 2021–2027**, The Hague.
- ・ 文部科学省 (2021). 第4期中期目標期間における国立大学法人運営費交付金の在り方について (審議まとめ)
- ・ Derrick, G. E., Faria, R., Benneworth, P., Budtz-Petersen, D., & Sivertsen, G. (2018). Towards characterising negative impact: Introducing Grimpact. **Sti 2018 Conference Proceedings**, 1199-1213
- ・ 佐々木亮. (2024). インパクト評価事例集 実験デザイン(RCT)から専門家判断まで 18 の評価事例 ～よりよい「社会的インパクト評価」の実施のために～, https://www.idcj.jp/9evaluation/sub5_files/impact_eval_jirei_28july2011.pdf, 2024年10月5日参照
- ・ 小林直人 (2023), 英国の人文・社会科学系研究が創造するイノベーション, 研究 技術 計画, 38(2):232-247
- ・ 日本学術会議科学者委員会研究評価分科会, (2023), 報告「人文・社会科学の研究による社会的インパクト ～事例調査に基づく評価のあり方の検討～」, 日本学術会議

質疑応答

～フロアからの質問

質問1:「マネジメント」の評価とは

源先生に質問です。評価対象の価値を高めることが、評価の目的の一つだのお話でした。一方で、プロジェクトなどのマネジメントは、それ自体がプロジェクトの価値を高めるツールだと思いますが、そうするとマネジメントの評価はどうなるのでしょうか。融合しているのか、別物なのか、どのように考えればよいか、教えていただければと思います。

源: マネジメントと関係なくても評価はできます。一方で、評価を使ってより効果的にマネジメントしていく、ひいてはそれが組織強化にもつながるという文脈で申し上げました。例えば、よくPDCAと言いますが、問題はPDCAが回らないところにあります。本当は回っていかなければならないものです。例えば、Pのプランの妥当性を問う評価や、目的を達成するためにこのデザインでいいんだろうかというセオリー評価のような要素を、必要に応じて実施し、ある一定期間終わった時の評価で、インパクトとかアウトカムを見ていくというように活用すれば、PDCAのサイクルに乗せることができると考えています。むしろ組織でやるのであれば、それに乗せないと無駄になってしまいます。つまり、次にその評価を何に使うのですか、ということが問題になるという観点で申し上げました。評価をやりましたと言って、評価報告書だけが積まれていることがよくありますが、それこそ評価に使った資源の無駄になります。意思決定にいかに関係というコンポーネントを入れていくかが重要なのではないかと思います。

ただ、評価はマネジメントとイコールではありません。評価結果を受けて、それを使うかどうか、またどのように使うかがマネジメントの決定です。いくら評価を行っても、そんなものは関係ないというのでは、それまでになってしまうので、何らかの意思決定の中で制度化していくのが必要ではないかと、そ

いう意味で申し上げました。

質問2：国立大学第4期中期目標期間における社会的インパクト評価について①

押海先生に質問です。限られた資源の中で予算を配分していく時に、最終的にはどこに配分するか意思決定しないといけない。そのため、非常に複雑にいろいろな点で評価しても、結局、意思決定する時は、もらえるかももらえないかになるため、多数決というか点数化するということになるざるを得ないと思います。今回の国立大学運営費交付金のミッション実現戦略分も、審査され、点数化されて決まってしまうのでしょうか。もしご存じでしたら教えていただければと思います。特に、社会的インパクトという質的な部分が重要になる評価で、その質的な部分を点数化するのは方法的に明確にできるものなのでしょうか。

押海：今回の社会的インパクト評価のスキームでは、評価は点数で出されます。第3期中期目標期間に実施された、成果に基づく配分の仕組みと同じであると仮定すると、提出されたケースを0点から4点の点数で評価し、その平均点に基づいて運営費交付金のうちの一定の額を80%から120%のような形で各大学に配分していくことになると思います。また、学内の事例を点数化することは、学内のインスティテューショナル・リサーチ（IR）にもつながると思います。これまでは、執行部が「エイヤ！」で決めていたところ、なるべく多くのデータを集め、分析し、データに基づいた判断ができるようにサポートするのがIRの役割です。ただし、社会的インパクトに関しては、現状では、実際に活用できるデータがまだほとんどありません。さらに、大学の執行部がデータに基づいた議論や判断をきちんとできているかについても、できているところとできていないところに結構差があるように思います。

また、社会的インパクトの質の評価については、非常に難しいのではないかと思います。みなさんにも、この後のワークショップの事前準備のために、大学の社会的インパクトについて考えていただいたと思うのですが、エビデンスを何にするかについて、かなり悩まれたと思います。例えば、これまでにな

かった新薬を開発して何人の人命が助かり、収益もこれぐらい出たという事例は、エビデンスを定量的に書きやすいと思います。それに対して、例えば、私の所属する国文学研究資料館は展示を行う施設を持っていますが、そこで開催された展示が訪問者の考え方に影響を与えた、ということを定量的に書くのは難しい。これは人文学一般や芸術分野でも同じような課題が存在します。つまり、その展示や芸術に触れた個人にとってどう役立ったのか、ためになったのか、ということはなかなか定量的には示しにくいので、そこは定性的に書いて、専門家の評価に委ねるしかないのではないかと思います。ただし、今回の文科省の通知では、実際にどのように評価するのかについては、まだ明示されていません。

源：今の点で一つ、源からも情報共有です。現在、北海道大学の博物館学の専門家とミュージアムの評価研究に従事していますが、質的な変容を見ていくことがとても重要だと思っています。質的な変容というのは、いわゆる来館者や関係者にとっての価値の表れで、それを量化するという試みはできると思います。その質的なものを把握し、どういう変容が実際に起きているらしいという仮説を立てた上で、それを基にアンケートを使って5段階評価などで量化していく。これはすでに量化の方法です。もちろん、もしそういうデータが必要であればですが。ただ、それがどう点数化とつながるかはあまりわかりませんが、量化することは可能です。ミュージアム評価の中では、質的・量的評価を組み合わせ実施していくことが、より本質に迫るのではないかという議論をしています。

質問3：国立大学第4期中期目標期間における社会的インパクト評価について②

今回の国立大学における社会的インパクト評価の実施について、創出した研究成果は、いつの時代のものでいいのでしょうか。研究が社会的インパクトにつながるまでには時間がかかるわけで、例えばすでにOBになった先生による研究成果で、今になって社会的インパクトが見えたものも対象になるのでしょうか。

押海：イギリスの REF2021 では、インパクトを生み出した研究活動の実施時期は 2000 年から 2020 年、研究からアウトプットが出た時期は 2014 年から 2020 年、インパクトが出た時期については 2013 年 8 月 1 日から 2020 年 7 月 31 日までと明示されています。日本の方は、研究活動の実施時期については第 4 期以前から取り組んでいるものを含む、インパクトが出た時期については第 4 期中と設定されています。ご質問はアウトプットの出た時期についてと理解していますが、その点については日本では設定がありませんし、研究活動の実施時期についても第 4 期以前のものを含むとされているので、現状の記載を踏まえると、かなり昔に実施された研究で、アウトプットとしての研究成果も古いものであっても、インパクトが第 4 期中に出たものであればケースとして提出可能と理解できると考えています。

質問 4：社会的インパクト評価という質的評価の「点数化」について

源先生に質問です。質問 2 で議論になった質的な部分についてです。質的な部分が重要なのはわかりつつ、一方で、質的な部分が様々な形で出てきたとき、例えばミッションがこんなふうの実現できたとか、プログラムとして実施したことができたとか、そういったこと自体の評価ならできるのですが、予算配分の話につながったときに、それぞれの評価結果を横に並べて優劣を問うということが発生すると思います。つまり本来優劣が測れないものが並んでいるのに、優劣をつけることになる。今回の社会的インパクト評価は、まさにその状況を孕んでいて、1 点～4 点で点数にするため、定性的な部分が完全に捨象された状態で動くのではないかと…。そうなると結構怖いことになるなと思っています。とはいえ、ただ文句を言っても仕方がないので、じゃあ、どうすれば建設的に、予算配分を最適化しようとする人たちにとって使えるものになるかということだと思っています。つまり、財務当局やその先にいる国会議員等々、もしくは納税者としての市民に対する説明まで含めて射程に入ってくるとはいますが、そういう人たちに社会的インパクトの内容を質的に丁寧に説明したとしても、結局どちらが優れているんですかという単純な問いをされてしまったとき、どう答えることができるでしょうか。もし何かしらご見解をお

持ちでしたらご教示いただければと思います。

源：難しい質問ですね。頭に浮かんだのは、国際協力の分野です。ODA の予算では 100 ぐらいのプロジェクトを毎年評価しています。実施している自分たちで評価しています。それで評点化しているんですが、その場合に、同じ評価基準を使っています。国際協力であるからこそ使える基準のようなもので、OECD が作ったものがあります。現在は、6 項目になっています。国際協力はお存じのとおり、5 年間ぐらい支援したら終わりです。ですので、終わった後に持続可能かどうか非常に重要になっています。ということで、持続可能性や、妥当性、有効性、インパクトもあるのですが、いくつかの基準があります。つまり、共通の評価基準で測ると組織で決めているわけですよ。でも、プロジェクトの種類も違いますので、個々のプロジェクトで評価する内容は当然違ってきます。ただ、同じ基準で見ているので、横断的に捉えたときに一定の共通性を持つことができるので、それをスコア化します。4 点満点でスコアをつけていますが、そうすると比較可能です。私は比較可能性というのは、改善を目的とした評価のためにはあまり意味がないと思っていて、おっしゃる通り、その後の予算配分とか、意思決定につなげるものであると思っています。つまりひとつの組織のアカウンタビリティを目的とした評価であると思います。

私が申し上げたいのは、ミッションに紐付いた何らかの評価基準、つまり自分たちはこういうところを重要だと思うのできちんと見ていくという基準ができるのであれば、そういった評価基準を設定するべきだ、ということです。それに加えて、評価対象になっているものの類型化も必要です。分野によって事業を取り巻く文脈がいろいろ違って来るわけです。それらの違いを無視して比較するのは酷な話で、どこまで意味があるのか疑問です。もし、事業の類型化というものが、組織として、しかもミッションに基づいた上で可能で、さらに、同じような評価基準で評価ができるのであれば、比較可能だろうと思います。

質問5：社会的インパクト評価における「価値」

まず、お話ししたいことがあります。社会的インパクトに関しては、実は今までもありました。大学では、現況評価の中で、社会、文化、経済などへの影響や効果を測ろうとしていました。昔からある意味では行われていたことです。もう一つ、実は我々研究者はずっと社会的インパクトを考えてきました。何かというと、学会というものが研究者にとっての社会だったので、それに対してのインパクトを大きくするというのをずっと考えていたわけです。だから、社会的インパクトというのは、アカデミズムにとって、必ずしも新しいものではないだろうと思っています。

そこで押海先生に質問です。REF2021と今回の日本での社会的インパクト評価の価値というところが実は違うと思っています。日本の方は、文科省が国立大学を「我が国社会の公共財として」と、わざわざ書いたわけです。一方、REF2021では「アカデミズムを超えて」と書いてあります。研究したものを超えて、その先に何があるのかを教えて欲しいと言っていますが、日本の場合には学術的な価値だけではなく、何か別のもののよう書いてある。価値観が違うように思っていますが、どのようにお考えでしょうか。

また源先生にお伺いしたいのは、価値が違うという意味では、源先生のご専門の参加型評価が非常に有効に働くと思うのですが、価値が違う人同士はその中でどうしたらいいでしょうか。

押海：ご質問について、はっきりとした答えはないのですが、確かに、「超えて」と書くのと、「だけでなく」と書くのでは、全然違うように思います。また、社会的インパクトが学術的な成果からどのように生まれるのか、つまり、学術的な成果と社会的インパクトの関係についても、一つの研究テーマとして存在しています。社会的な価値と学術的価値の関係性みたいなものが、REFと今回の日本の社会的インパクト評価とでは異なるのではないかと思います。そうではなく、ただこのように書かれているだけかもしれないのですが。

ただし、ご指摘の点は非常に重要だと思いますので、今回の文科省のスキームの中でどういうことが求められているのかは、もう少しきちんと考えていか

なければならないと思いますし、文科省の方と議論できる機会があれば、そのような点に留意して議論したいと思っております。

源：価値が違う人たちはどのように評価に関わることができるのかですが、価値が同じだったら参加型評価をやらなくてもいいと思っています。ただし価値観といってもイデオロギーではありません。イデオロギーが違うと難しいと思います。物事に対する見方が違う、つまりみんな経験が違うし、バックグラウンドも社会におけるポジションも違います。でもそういったステークホルダーが社会を作っているわけで、違うからこそ生まれる新しい何か、創発的な何か、新しいアイデア、そういうものが参加型の評価プロセスで出てくることで、さらに前に進むことができるのだと思います。そうやってまた何か新しい議論が出てくるかもしれないという、かなり継続的な評価の取り組みが参加型評価だと思っております。

第2部 ワークショップ

研究の社会的インパクトとはどういうものか

～事例から学ぶ

開催場所：北海道大学 創成科学研究棟 5F 大会議室

参加者：27名（登壇者2名を含む） 6グループ

※1グループは4～5名で構成。

6グループのうち1グループは企画者を中心とし、オンライン参加。

タイムテーブル：説明・準備（約10分）⇒グループワーク（約50分）⇒全体発表・ディスカッション（約60分）〈120分〉

ワークショップの概要

本ワークショップは、研究が生み出す社会的インパクトについて、自分自身が考える社会的インパクトとはどのようなものかという点からスタートし、そもそも社会から求められているインパクトとはどのようなものか、インパクトはどのように可視化できるのか、社会的インパクトを研究評価に用いる際の課題とは何なのかといった論点について、参加者が理解を深める契機にしたいとの考えから企画された。国立大学では、第4期中期目標期間中に社会的インパクト評価が実施され、その結果が第5期中期目標期間の運営費交付金配分に反映されることもあり、業務上、情報ソースの取りやすさ、ナラティブの使いやすさ、高評価の得やすさ等から事例を選ぼうとしがちである。本企画では、いったんその視点から離れることで、エビデンスの取りにくさから対象外とされてきた事例や、社会的インパクトを創出していたにもかかわらず当たり前すぎて選択肢の外にあった事例なども検討対象となることを目指した。企画にあたっては、主催校である北海道大学を中心に、人文・社会科学系 URA ネットワークの有志メンバー¹がオンラインで数回にわたり議論を重ね、ワークショップの目的や、参加しやすく気づきが得られる構成について検討した。

ワークショップは、参加者による事前準備、当日のグループワーク、全体発表・ディスカッションの3構成からなる。

まず事前準備では、研究が生み出した社会的インパクトだと自身が考える事例について、企画側が指定した準備シートに沿ってまとめ、当日のグループワークで発表する前提で事前に提出した。グループ分けは、参加登録時の二つの質問、1) 取り上げたい事例の研究分野、2) 参加者のバックグラウンド、担当業務等²を参考に企画側で行い、当日に参加者に公表した。

ワークショップ当日は、提出された事例を集約し、事例集として参加者限りで共有された。参加者限りとしたのは、進行中のプロジェクトや研究者の確認を得ていない事例であっても、自由に議論し互いの理解を深められるようにするためである。事例は、人文学・社会科学が半数以上を占めたが、約4分の1が医学保健・ライフサイエンスとなった³。

グループワークでは、各自の事例紹介と、提出した事例についてグループ内での意見交換を行った。事例紹介は、社会的インパクトの内容説明だけではなく、なぜこの事例を選んだか、なぜこの事例が面白いと思ったか、事例自体の問題点、課題等も併せて説明し、グループ内で共有した。グループワークを通じて、多様な研究テーマが創出する社会的インパクトの具体的なイメージと、そのイメージを社会的インパクトとして可視化する難しさを共有することができた。

¹ メンバーは以下のとおり（五十音順）：荒木裕子（広島大学）、稲石奈津子（京都大学）、押海圭一（国文学研究資料館）、川人よし恵（大阪教育大学／大阪大学）、佐々木結（京都大学）、新澤裕子（東京大学）、中野悦子（北海道大学）、藤川二葉（京都大学）、森本行人（筑波大学）、山田綾子（大阪大学）。

² 質問は以下のとおり：1) 現時点で、取り上げたい事例の分野をお知らせください（変更になっても構いません）。選択肢：①医学保健・ライフサイエンス、②物理・工学・数学、③社会科学、④人文学・芸術、⑤その他、から1つ選択；2) グループ分けの参考としますので、ご自身の担当業務の詳細や、過去に関わったプロジェクト、バックグラウンド（研究分野）等について、ご記載ください（例：研究評価、IR担当、国際業務担当、産学官連携担当、RISTEX〇〇プロジェクトへの参加経験あり、歴史学、宇宙物理学、等）。

³ 26件中件数の多いものから、④人文学・芸術：9件、③社会科学：8件、①医学保健・ライフサイエンス：6件、②物理・工学・数学：2件、⑤その他：1件（＝①と③にまたがる事例）の順。

全体発表・ディスカッションでは、まず各グループの代表が、グループワークで紹介された事例のポイントと議論の内容を発表した。おもに事例紹介が中心ではあったが、各事例が持つ課題について、様々な角度から示されることとなり、参加者が研究の社会的インパクトについての理解を深める機会となった（議論の詳細は、全体発表・ディスカッションからを参照のこと）。

一方で時間や進行の関係上、これらの課題や企画段階で挙げられていた論点などをさらに深掘りして議論するまでには至らなかった。事後に行った参加者アンケートでも、自分で事例を検討・準備し、参加者らとディスカッションした点については満足度が高かったが、改善点として、議論にもっと十分な時間を取った方が良い、ワークショップの目的やディスカッションのゴールが設定されていた方が議論しやすい、という意見が挙げられた（アンケート回答の詳細は事後アンケートの結果を参照のこと）。

今後、各所でワークショップを開くなどして、事例ベースで研究が創出する社会的インパクトとは何かを考える機会を増やすことが、研究と社会とのつながりを考える契機になると期待している。またこれは、URA など研究推進担当者の「ナラティブ力」の向上にも寄与できると考える。なお準備シートを含む事前準備の配布資料は、本報告書の 88 ページに掲載されており、北海道大学統合 URA 本部ウェブサイト (<https://u4u.oaic.hokudai.ac.jp/12466/>) からダウンロードできる。

全体発表・ディスカッションから

全体発表・ディスカッションの中で示された意見や課題は、以下のとおり⁴。

研究の「社会的インパクト評価」について

・イギリスでは、次回 REF2029 のインパクト評価で、インパクトとともにエ

⁴ ここでの記載内容は、個人や事例、プロジェクトなどが特定されないように配慮しながら、発言の趣旨が伝わるよう、適宜編集し項目ごとに集約している。そのため当日の発言がそのまま文字おこしされたものにはなっていないことをあらかじめご承知おきいただきたい。

ンゲージメントが指標に含められることになり、議論が行われている。かなり混乱していると聞が、これは、2014年にREFでインパクト評価をはじめて導入しようとした時と同じような状況である。一度やってみることで、マネジメント層の意識も変わる。論文指標だけでなく、インパクトも評価され、国の研究費の配分にまで影響するという経験は、英国大学のマネジメント層の意識を変えてきた。日本でも、URA主導でそういうポジティブな方向につなげていけると良い。

- ・ 研究評価に社会的インパクト評価が導入されると、課題解決志向型の研究が評価され、そうでないものが評価されないようになるのではないかな。

社会的インパクトへの意図の有無、戦略性

- ・ 政策改善などの社会的インパクトが当初から織り込み済みの研究プロジェクトもあれば、そもそも社会的貢献を意図していない研究が「副次的に」政策に参照されていくというケースもある。基礎研究の多くが社会的インパクトを意図していないところから始まっているので、そのような研究がどのように社会的インパクトを出していくのかを見ていくことが重要になる。
- ・ 産学連携での社会的研究と、基礎研究・人社系から創出された社会的インパクトとでは、大きな違いがある。前者はそもそも社会的インパクトが創出できなければ共同研究は失敗とも言える。一方、後者は最初から課題設定することになじまない研究である。そういうものがあるのに、課題設定を研究者に求めるのは非常に難しい。
- ・ 社会的インパクトに必要なものは、セクターをこえた交流や対話。アカデミア以外の人当事者となり、変化の影響を受ける。そのため、創出されたものを見つけ出す当事者以外の人材があつてこそ、インパクトは達成される。社会的インパクトは政策に対して変化をもたらすこと、概念や考え方の展開、政策変更などを指す。またインパクトはポジティブとは限らない。ネガ

ティブなインパクトもある。コンサルティング会社はポジティブな数字だけ算出するので重宝される。

- ・ REF の場合、どの審査区分（研究分野）で出すかという戦略的側面もある。
- ・ 例えば展示がどのような行動変容を起こすかについての調査の場合、どんな行動変容が起きたかをどのように（何をエビデンスとして）見ていくのかが課題であると同時に、その展示がどういうインパクトを起こしたいと企画されているかについての考察も必要。

研究のインパクトに対する「帰属性」

- ・ 研究が政策に影響を及ぼした因果関係を説明することが難しい。内容的にはマッチしていたとしても、帰属性のエビデンスがない場合に社会的インパクトがあったと言えるかどうか。例えば、その研究を行っている研究者が審議会などに招へいされ研究の意義を説明したなら、その因果性の根拠となるが、そうでない場合は難しい。

エビデンス、情報源（Source）

- ・ 確実に政策決定にかなりの影響を及ぼしているにもかかわらず、方針や要綱・要領などの具体的な政策・行政文書になった場合に、特定の学派からの引用であることがわからないようにするという慣行があるため、エビデンスとして残らず、一般にはわからない形にならざるを得ない。
- ・ エビデンスを書く難しさがある。最初からインパクトの創出を想定していない場合には、エビデンスを残せない。
- ・ 後付けでエビデンスを積んでいくのは難しいので、研究者との協力が必要となるが、研究者はなかなかエビデンスまでそろえる時間や余裕はない。URA がどれくらいつないでいけるかがカギ。

- ・社会的インパクトがあると言っても、可視化できないと評価はできないので、情報源をどうするかが課題。

研究費、外部資金、資金調達

- ・研究テーマが課題解決型で、研究サイドでは成果には社会的インパクトが創出されていると考えていても、ファンディングエージェンシーや外部評価で十分な理解が得られず研究費が減少し、その結果、想定した社会的インパクトの創出が難しくなることが実際に起こっている。
- ・社会的インパクト創出のための資金調達手段としてクラウドファンディングを用いると、継続性が難しくなるため、自治体やコミュニティを巻き込んだ制度改革、社会変革を検討する必要がある。

研究が目指すものと社会が求めるものとのギャップ

- ・研究者の役割は、問いを立て、仕組みを作り、言語化し、客観的汎用化を行い、普遍知を取り出すこと。そしてこれを住民に示すことで、当事者としての意識変革や行動変容に結びつく。それを見ることで、研究者も自分の研究が社会的影響を起こしたと知る、という循環になる。しかし、その変化の量的なエビデンスを示すのは難しい。さらに、例えば過疎が課題だったとしても、過疎の解消が住民から求められていないこともある。つまり過疎であり続けたとしても、変容が起こることで住民の幸福度が上がる場合、この取り組みの評価は、最初に立てた KPI では測れず、まさに参加型評価が有効になるだろう。さらに成果は長期的に見なければわからないので、国立大学の評価期間中にうまく成果が出るとは限らない。研究によってはインパクトが出るまでに非常に時間がかかるものがある。

社会的理解の促進、アウトリーチ

- ・研究を進めて社会に受け入れてもらうための工夫が必要。

- ・社会に早く理解してもらう工夫、メディアへの露出、人の目につく工夫。

その他

- ・インパクトのストーリーを考える作業は、研究を広げて考える発想の練習になるので、今回のようなエクササイズがあってもよい。
- ・ストーリーで伝えられるインパクトがある。スナップショットではなく、有名誌に掲載された論文がその後どうなったのかを見せることで、研究の本当の良さが示せるのではないか。
- ・社会的インパクトといっても、その範囲（reach）が学術界プラスアルファの少数のコミュニティにのみ影響する場合もある。

登壇者からのコメント

押海：エビデンスは早めに集めておかないと、ギリギリになってから集めるのは難しい。各大学で、本日のワークショップで行ったようなインパクト集をどのように作っていけばよいのか。研究シーズ集を公開している大学は多いので、同じように整備する必要がある。一方で、第4期の大学の社会的インパクト評価への対応は非常に難しいと改めて感じた。特に、大学等の執行部に近ければ近いほど難しい。例えば小規模の国立大学では、全体で3件のケーススタディを提出することを求められることになるが、ケーススタディの選択について学内でどのように合意を得るかという問題が生じる。

源：私自身は質的評価者なので、今回のワークショップの議論を通じて、これから質的評価が面白くなると思った。一方で、事例発表にもあったように、市場性と倫理の問題をどう考えるか、社会的リターンと財務的・経済的リターンをどう捉えていくかが非常に難しいと改めて感じた。

インパクトを見せていく戦略性は非常に重要。産学連携や政策化を意図している場合は、ステークホルダーが集まってくる。公共性や経済性など価値基準

があらかじめ想定される場合は、戦略も立てやすい。だから定量的な社会的インパクトも示しやすいのではないか。一方で、研究にはあらかじめアウトカムを設定できない分野、やってみないとわからない分野もある。その場合は、時間の経緯が重要になる。プログラム評価では、近位のアウトカム、遠位のアウトカムと言ったりするが、近位のアウトカムは直接的なアウトカムを指し、研究の場合は学術的価値のような本質的なアウトカムだと思う。一方で、遠位のアウトカムは社会的な広まり、市民や地域への影響になると思う。こういうものは創出までに時間がかかるので、時間がかかるということについてストーリー性をもってうまく見せていくというのが大事になる。そして、そうすることによって、遠位のアウトカムを定量的に見せる実証研究もある程度可能になるのではないかと考える。遠位のアウトカムを考えるとステークホルダーが多くなるので、最初はあまり想定していなかったけれど、広げないとうまくインパクトを出せないよね、エンゲージメントをもっと考えないとダメだよね、という議論が増えていくことが期待できる。こういったことも含め、今回の議論を通じて、大学側の社会的インパクトについての説明力が高まっていくことが期待される。

事後アンケートの結果

◎アンケート対象：

ワークショップ参加者 27 名うち、登壇者 2 名および北海道大学担当 URA1 名を除く 24 名

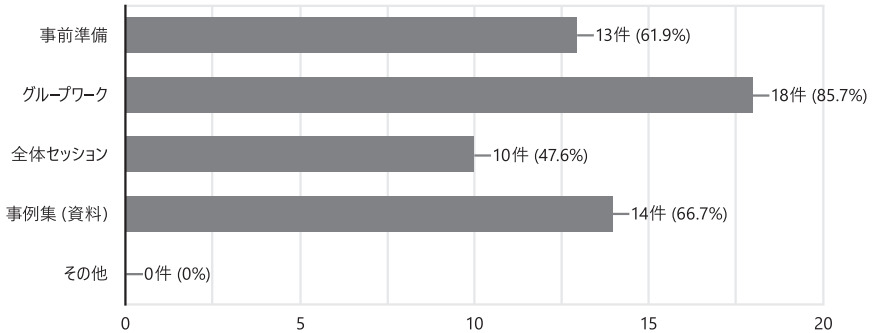
◎回答数：

21 件（回答率：87.5%）

◎質問項目

- ① 満足度：満足 14 件（66.7%）、やや満足 5 件（23.8%）、
どちらでもない・ふつう 2 件（9.5%）、
やや不満 0 件（0%）、不満 0 件（0%）

② 良かった内容（複数回答可）



③ 満足度や良かった内容について、なぜそのように回答したかの理由、ワークショップについての意見や感想など（自由回答、文末のカッコ内は①②の回答）

〈事前準備～グループワーク、事例について〉

- ・事前準備では、新しく研究者とその研究を知ることができ、自分なりに社会的インパクトとは何かを考える機会になったことがとても良かった。グループワークや全体セッションでは、それぞれが考える社会的インパクトが異なることが分かり、その評価が難しいものであるだろうと認識できた。事例集もとても参考になるので、ありがたいと思った。（満足／事前準備、グループワーク、全体セッション、事例集）
- ・「社会的インパクト」という言葉が具体的な事例になることで、参加者間のイメージ共有ができた点がとてもよかったです。また、事前準備は割と負担は高かったのですが、自分の考えを整理するきっかけとなってありがたかったです（こういう機会がないと普段の業務に流されて落ち着いて考える機会がないので...）。（満足／事前準備、グループワーク、全体セッション、事例集）
- ・今回のワークは正直、事前準備の負担が大きかったが、その分真剣で厚みのある話し合いができた。お土産（事例集）も価値あるものとなった。（満足

／事前準備、グループワーク、全体セッション、事例集)

- ・ 自分で事前準備をしてからワークに臨んだので、より深い議論ができたと思う。(満足／事前準備、グループワーク、事例集)
- ・ 自分の事例はまったく余裕がなく、申し訳なかったですが、みなさんがこれこそは、と示してくださった事例から、とても豊かな多様性や、将来に向けてのポジティブな研究の力を感じられたように思い、運営費交付金配分に限らず、研究の魅力の可視化という目的でも十分に使える型のように再発見しました。(満足／グループワーク、全体セッション、事例集)
- ・ 事例集は、参加者がどのような観点で、どのように社会的インパクトを評価しているのか、非常に参考になります。これを眺めながら、自分の事例に応用させる方法を考えられるだけでも、参加した価値があったと考えられます。改めて、みなさまが作成された資料の「自分限りでの」提供に感謝申し上げます。(満足／グループワーク、事例集)
- ・ 実際にやってみることで、エンゲージメントの評価をする重要性やエビデンスを示す難しさ、研究の多面性を感じられた。(満足／事前準備、グループワーク)
- ・ 自身の研究テーマについて、別の視点からの意見を得ることができたから。(満足／グループワーク)
- ・ 各参加者がさまざまな社会的インパクトの事例を取り上げていて、自分自身の社会的インパクトの定義の枠組みが広がった気がしました。(やや満足／事前準備、グループワーク、事例集)
- ・ 大学の研究プロジェクトの社会的インパクト評価について、実際に自分の手

で試行できたことが良かった。(やや満足／事前準備、事例集)

- ・事前準備は思考の整理に役立った。また、グループワークは色々な意見を聞くことができて参考になった。(どちらでもない・ふつう／事前準備、グループワーク)

〈要望・改善点〉

- ・資料の準備が難しく感じました(とりあえず埋めました)。参加者の事例を拝見・拝聴して、とても勉強になりました。グループワークも全体セッションも同意できる内容ばかりでした。人社 URA の皆様の課題感を伺っていると、研究分野は違えど、同じような課題だと感じました。短時間でのワークでしたので、皆様との協議が中途半端になってしまったのが残念でした。(満足／事前準備、グループワーク、全体セッション、事例集)
- ・事前準備の資料はどの方のものもとても興味深い内容でした。可能であれば、事前に資料を配布いただき、その内容を把握したうえでグループディスカッションができれば、もう少し掘り下げられたように思いました。ディスカッションはとても楽しく、もっと時間があつたらと感じました。(満足／事前準備、グループワーク、事例集)
- ・スケジュールの都合上やむを得ませんが、グループワークの時間がもう少しあると良かったです。(やや満足／事前準備、グループワーク、全体セッション、事例集)
- ・正解が決まっていないテーマだと思うので、各参加者の考え、事例を知ることができて参考になった。一方で、ワークショップの目的・ゴールがはっきりしていなかった気がするので、例えば「自分たちが考える社会的インパクトの定義とは」など、何かしらお題があると議論しやすかったように思う。(どちらでもない・ふつう／事前準備、事例集)

※以下の資料は、<https://u4u.oaic.hokudai.ac.jp/12466/> に掲載されています。

第19回JINSHA情報共有会：ワークショップについて

<テーマ> 研究の社会的インパクトとはどういうものか～事例から学ぶ

<目的>

日常業務では社会的インパクトをどのように評価するのが話題になりがちですが、そもそも**社会的インパクトとはどういうもので、研究が社会的インパクトを生み出すとはどういうことなのか**をテーマとすることで、まず社会的インパクトを**社会の一員である自分と関係のあるもの**として考えてみることからスタートしたいと考えます。そのうえで、なぜ評価するのか、どのように評価するのか、可視化がなぜ必要かなど、第1部とも接続しながら社会的インパクトに関する日ごろの疑問や試みなどを共有し、多様な考えから学ぶことにより、各々の理解を深めることを目指します。

<プログラム>

日時 : 15時10分～17時10分 (120分)
場所 : 北海道大学 札幌キャンパス 創成科学研究棟 5F大会議室
開催形式 : 対面(30人程度)※企画メンバーがオンラインで参加予定です
1グループ4～6人 × 5～6グループ ※グループ分けは当日発表
タイムテーブル :
前説 5分
グループワーク 50分(各自が事前準備について発表3分⇒グループディスカッション)
全体発表(5分発表・3分質疑 × MAX 6 グループ) 50分
全体ディスカッション、登壇者からのコメント 15分

1

事前準備について

- 1) ワークショップでは、参加者がアカデミアにおける**研究が国内外で社会的インパクトを創出している(した)と思う事例**を持ち寄り、社会的インパクトとは何かについての議論を深めます。
- 2) 参加者には、指定の準備シート(別添パワポ様式、本資料6～9頁参照)に沿って、社会的インパクトについての事前準備をお願いします。提出いただいたものは、ワークショップ参加者限りで共有(※)します。この点をご確認の上、ご準備くださいますようお願いいたします。また当日共有される事例の取り扱いについても、あらかじめご確認ください。
(※)会場での紙媒体配布、ならびにデータ共有(閲覧のみ、ダウンロード不可)
- 3) グループワークではご準備いただいた事例を発表していただきます(各自の発表時間は3分程度)。
- 4) 完成した準備シートはPDF化し**前日10月8日午前10時までに事務局にメールでお送りください**(送付先: jinshaforum_hokudai@oeic.hokudai.ac.jp)。事務局で取りまとめます。
- 5) グループディスカッションでは、各事例の特徴について、なぜ評価するのか、どのように評価するのかを念頭に議論し、議論の内容を全体発表会で発表していただく流れとなります。
- 6) 不明点などは、メールにてお気軽にお問い合わせください。
(北海道大学統合URA本部・中野: nakano@oeic.hokudai.ac.jp)

2

準備シート作成に当たっての留意点

- 1) 事例は、ご所属の組織内のものでも他機関のものでも構いません。ご自身が、面白い、スゴイと思った事例を取り上げてください。
- 2) 研究が創出する社会的インパクトの事例を取り上げてください。研究プロジェクト等として研究以外の要素が含まれる場合は問題ありませんが、教育活動など研究以外が基となり創出される社会的インパクトは除きます。
- 3) 取り上げた社会的インパクトがどの領域で創出されたかは、REF2021などの領域の例示を参考にしてください。インパクトの種類 (Type) も多様です。どこかに当てはめることに捉われずに、ご自身の取り上げた事例がどういうものかを参加者に伝えるための参考としてください。
- 4) 事例について、以下のURLが参考になります。発表事例をここから選んでも構いません。
 ※イギリスREF2021 <https://results2021.ref.ac.uk/>
 REF2021: 4Star impact case studies <https://www.stephenkemp.co.uk/ref2021-4-star-impact-case-studies/>
 オーストラリア ARC DATA Portal: Impact Studies <https://dataportal.arc.gov.au/EI/Web/Impact/ImpactStudies>
 日本学術会議報告「人文・社会科学の研究による社会的インパクト ～事例調査に基づく評価のあり方の検討～」
<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/kohyo-25-h230901-abstract.html>
 ＊本報告書に事例集があります (25-32頁) 一覧表が以下にありますので、こちらもご活用ください
<https://docs.google.com/spreadsheets/d/1h6XvETzdM3b5lIP03xeqMGqbLn5ANew8parO-UNSU/edit?pli=1&qid=1195779809#gid=1195779809>
- 5) 様式 (PPT) を用い、基礎情報を含めて全体を4枚以内でおさめてください (文字は12ポイント)。当日は2アップ両面印刷で参加者に配布します。図なども用いても構いません。
- 6) 記入内容の「正解」はありません。むしろ皆さんの試行や模索、疑問点を積極的に発表していただき、研究の社会的インパクトの意味や意義、研究評価や評価結果の活用の意義や課題についての議論につなげたいと思います。

3

(参考) REF2021での審査区分

<https://2021.ref.ac.uk/panels/units-of-assessment/index.html>

The 34 units of assessment are grouped into 4 main panels: • Main panel A: Medicine, health and life sciences • Main panel B: Physical sciences, engineering and mathematics • Main panel C: Social sciences • Main panel D: Arts and humanities	<table><tr><td>1 - Clinical Medicine 2 - Public Health, Health Services and Primary Care 3 - Allied Health Professions, Dentistry, Nursing and Pharmacy 4 - Psychology, Psychiatry and Neuroscience 5 - Biological Sciences 6 - Agriculture, Food and Veterinary Sciences</td><td rowspan="2">A</td></tr><tr><td>7 - Earth Systems and Environmental Sciences 8 - Chemistry 9 - Physics 10 - Mathematical Sciences 11 - Computer Science and Informatics 12 - Engineering</td></tr><tr><td>13 - Architecture, Built Environment and Planning 14 - Geography and Environmental Studies 15 - Archaeology 16 - Economics and Econometrics 17 - Business and Management Studies 18 - Law 19 - Politics and International Studies 20 - Social Work and Social Policy 21 - Sociology 22 - Anthropology and Development Studies 23 - Education 24 - Sport and Exercise Sciences, Leisure and Tourism</td><td rowspan="2">C</td></tr><tr><td>25 - Area Studies 26 - Modern Languages and Linguistics 27 - English Language and Literature 28 - History 29 - Classics 30 - Philosophy 31 - Theology and Religious Studies 32 - Art and Design: History, Practice and Theory 33 - Music, Drama, Dance, Performing Arts, Film and Screen Studies 34 - Communication, Cultural and Media Studies, Library and Information Management</td></tr></table>	1 - Clinical Medicine 2 - Public Health, Health Services and Primary Care 3 - Allied Health Professions, Dentistry, Nursing and Pharmacy 4 - Psychology, Psychiatry and Neuroscience 5 - Biological Sciences 6 - Agriculture, Food and Veterinary Sciences	A	7 - Earth Systems and Environmental Sciences 8 - Chemistry 9 - Physics 10 - Mathematical Sciences 11 - Computer Science and Informatics 12 - Engineering	13 - Architecture, Built Environment and Planning 14 - Geography and Environmental Studies 15 - Archaeology 16 - Economics and Econometrics 17 - Business and Management Studies 18 - Law 19 - Politics and International Studies 20 - Social Work and Social Policy 21 - Sociology 22 - Anthropology and Development Studies 23 - Education 24 - Sport and Exercise Sciences, Leisure and Tourism	C	25 - Area Studies 26 - Modern Languages and Linguistics 27 - English Language and Literature 28 - History 29 - Classics 30 - Philosophy 31 - Theology and Religious Studies 32 - Art and Design: History, Practice and Theory 33 - Music, Drama, Dance, Performing Arts, Film and Screen Studies 34 - Communication, Cultural and Media Studies, Library and Information Management	医学保健・ライフサイエンス 物理学・工学・数学 社会科学 芸術・人文学
1 - Clinical Medicine 2 - Public Health, Health Services and Primary Care 3 - Allied Health Professions, Dentistry, Nursing and Pharmacy 4 - Psychology, Psychiatry and Neuroscience 5 - Biological Sciences 6 - Agriculture, Food and Veterinary Sciences	A							
7 - Earth Systems and Environmental Sciences 8 - Chemistry 9 - Physics 10 - Mathematical Sciences 11 - Computer Science and Informatics 12 - Engineering								
13 - Architecture, Built Environment and Planning 14 - Geography and Environmental Studies 15 - Archaeology 16 - Economics and Econometrics 17 - Business and Management Studies 18 - Law 19 - Politics and International Studies 20 - Social Work and Social Policy 21 - Sociology 22 - Anthropology and Development Studies 23 - Education 24 - Sport and Exercise Sciences, Leisure and Tourism	C							
25 - Area Studies 26 - Modern Languages and Linguistics 27 - English Language and Literature 28 - History 29 - Classics 30 - Philosophy 31 - Theology and Religious Studies 32 - Art and Design: History, Practice and Theory 33 - Music, Drama, Dance, Performing Arts, Film and Screen Studies 34 - Communication, Cultural and Media Studies, Library and Information Management								

4

4

(参考) REF2021での社会的インパクトの定義

https://2021.ref.ac.uk/media/1848/ref2021_key_facts.pdf

What is “Societal Impact”?

Impact “is defined as an effect on, change or benefit to the economy, society, culture, public policy or services, health, the environment or quality of life, beyond academia.”

インパクトとは「**学問の枠を超えて**、経済、社会、文化、公共政策やサービス、健康、環境、生活の質に対する影響、変化、利益と定義される」

Area of Impact REF 2021 Annex A of Panel criteria and working methods から

Impacts on the health and wellbeing of people, and animal welfare/Impacts on creativity,culture and society/ Impact on social welfare/Impacts on commerce and the economy/Impacts on public policy, law and services/ Impacts on production/Impacts on practitioners and delivery of professional services,enhanced performance or ethical practice/Impacts on the Environment/Impacts on understanding,learning and participation

人々の健康と福祉、動物福祉へのインパクト、創造性・文化・社会へのインパクト、社会福祉へのインパクト、商業と経済へのインパクト、公共政策・法律・サービスへのインパクト、生産へのインパクト、実務家および専門サービスの提供・業績向上・倫理的実践へのインパクト、環境へのインパクト、理解・学習・参加へのインパクト

※インパクトの種類については、<https://2021.ref.ac.uk/publications-and-reports/panel-criteria-and-working-methods-201902/index.html> を参照

国立大学法人運営費交付金「ミッション実現戦略分」の評価における社会的インパクトの定義

(文部科学省事務連絡/2024年3月27日)

：社会的インパクトとは「国立大学が、我が国社会の公共財として、**学術的な価値だけでなく**、社会、経済、国民生活等の進歩に与えた影響」

(社会的インパクトを生み出す「主体」は国立大学で、研究だけでなく**教育や地域貢献**が基礎となるインパクトも対象)

インパクトの領域(例)：

国際社会への寄与/地域社会への寄与/政策形成への寄与/診療・福祉の改善への寄与/社会インフラの強化/新産業基盤の創出/地球環境・資源の保全への寄与/新しい文化創造への寄与/専門職の高度化への寄与

5

準備シート①

氏名：

所属：

緑色の文字は提出時には削除し、行間を詰めて記載してください

事例のタイトル

「

社会的インパクト創出のメインプレーヤー：※大学や研究所、研究プロジェクトチーム、個人研究者、等の名称（複数可）

研究分野：A-医学・ライフサイエンス、B-物理・工学・数学、C-社会科学、D-芸術・人文学（

※A～Dのいずれかを○で囲み、カッコ内にREF2021の34分野から一番近い番号を記載してください。34分野については4頁を参照。

基となる研究が実施されていた時期：年 月 ～ 年 月

社会的インパクトが発現された時期：年 月 ～ 年 月

※時期の制限は設けません。

1. 取り上げた事例の社会的インパクトについて説明してください

※文字の大きさは12P

① インパクトの領域（Area）、種類（Type）、インパクトの規模（ローカル・ナショナル・グローバルなど）を意識して説明してください（「準備シート作成にあたっての留意点」（3頁）の3）を参照）

② データベースなどを参照した場合は元となる情報のURLも記載してください

6

準備シート②

氏名：

所属：

緑色の文字は提出時には削除し、行間を詰めて記載してください

(1. つづき)
※文字の大きさは12P

2. インパクトの基盤となっている研究について説明してください。

※文字の大きさは12P

7

準備シート③

氏名：

所属：

緑色の文字は提出時には削除し、行間を詰めて記載してください

(2. つづき)
※文字の大きさは12P

3. 事例の面白さ、特徴的な点などをこの事例をとりあげた理由を含めてご説明ください。

※文字の大きさは12P

8

準備シート④

氏名：

所属：

緑色の文字は提出時には削除し、行間を
詰めて記載してください

(3. つづき)

※文字の大きさは12P

4. そのインパクトは根拠となる情報源（source＝根拠データ、指標など定量的なもの、根拠となる事実等が掲載されている報告書、記事など）に紐づけることができそうですか。できそうならどんなものがあるか可能な範囲で、難しい場合はその理由をご記入ください。

※文字の大きさは12P

全体を4枚以内でまとめてください

当日は2アップ両面で印刷します

各項目の分量など自由です（枠はあくまで例示です。適宜調整してください）

図表を使っていただいても構いません

登壇者プロフィール

(敬称略。所属、職階等は開催時のものです)



源 由理子

(明治大学 公共政策大学院 ガバナンス研究科・教授)

国際基督教大学卒。アメリカ国際経営大学院修士課程修了（MIM）。東京工業大学大学院社会理工学研究科博士後期課程（人間行動システム専攻）修了、博士（学術）。国際協力事業団（現国際協力機構、JICA）等を経て現職。これまで JICA・世界銀行・自治体・NPO/NGO 等における評価システム構築・手法開発の研究・実践に携わる。

文科省、厚労省、総務省、文化庁、自治体等の評価関連委員、研修講師等を歴任。日本民間公益活動連携機構専門家会議委員、JICA 有識者評価委員会委員、一般財団法人社会的インパクト・マネジメント・イニシアティブ（SIMI）評議員。日本評価学会副会長。専門は評価論、社会開発論。



押海 圭一

(国文学研究資料館 研究部・特任准教授)

早稲田大学文学部卒。京都大学法科大学院修了（法務博士）。政策研究大学院博士後期課程在学中、研究テーマは「人文系研究評価」。2011 年より、総合地球環境学研究所特任専門職員（IR 担当）、琉球大学主任リサーチ・アドミニストレーター（研究費獲得支援、研究プロジェクトマネジメント、研究 IRなどを担当）、人間文化研究機構

構本部機構長室 特任助教（評価・IR 担当）を経て、現職。現在は研究部に所属し、館の IR 実務および人文・社会系研究評価研究を実施中。

「社会的インパクト」を 「評価学」の視点から考える

近年、大学が社会に及ぼす「社会的影響（インパクト）」に注目が集まっています。国内での要因のひとつには、国立大学法人第4期中期目標期間の運営費交付金「ミッション実現戦略分」の配分における、社会的インパクト評価の導入が挙げられますが、それ以前から、大学が社会とつながり、社会に貢献することへの期待が国や資金配分機関のみならず社会からも高まっているように思われます。研究評価の文脈からも、欧米を中心に研究成果の多様性や定性的評価の重要性が唱えられるようになっており、研究成果のひとつとして社会的インパクトへの注目度が増えています。

一方で「社会的インパクト」という言葉については、社会課題解決を目的とした事業や取り組みを評価し事業改善や資金調達に活用する「社会的インパクト評価」の流れがあり、さらに近年ではインパクト投資やESG評価指標などでも多用されるなど、言葉が独り歩きしているようにもみえます。

そこで今回のJINSHA情報共有会では、大学の研究推進担当者にとってなじみのある研究評価の文脈とは少し距離のある「評価学」の視点から「社会的インパクト」について学ぶことにより、改めて研究が創出する社会的インパクトとは何かを考える機会を皆さんとともに作りたいと考えています。

2024年 10月9日 水

プログラム

第1部 講演 13:10~14:50 (オンライン+対面 (※), 定員 100名 / 先着順)

- 源 由理子 明治大学・公共政策大学院・専任教授
「評価と社会的インパクト～評価学の視点から（仮）」
- 押海 圭一 国文学研究資料館 研究部・特任准教授
「大学における社会的インパクト評価と評価学的アプローチの接続（仮）」

第2部 ワークショップ 15:10~17:10 (対面開催のみ、定員 30名 / 先着順)

- 「研究の社会的インパクトとはどういうものか～事例から学ぶ」

ワークショップ会場 北海道大学 北キャンパス 創成科学研究棟 5F 大会議室

※ワークショップ参加者は講演を現地でご参加いただけます（開場：12:40～）
ワークショップ参加者には事前に事例を準備していただきます（詳細別途）
ワークショップ終了後、情報交換会（会費制）を開催します

対象者：全国の大学・研究機関で、研究推進・支援業務に携わる／興味のある URA や教職員の方、本テーマに関心のある研究者、政策関係者の方

参加
申し込み

申し込みバッチ

- 第1部 のみ 10月2日（水）17時
- 第1部 + 第2部 9月20日（金）12時（正午）

申込フォーム



申込フォーム: <https://forms.gle/jj87BQ6NMrdC9Mky8>

要事前申込

主催

北海道大学 統合URA本部

共催

大阪大学 経営企画オフィスURA部門
京都大学 学術研究展開センター
筑波大学 研究戦略イニシアティブ推進機構
研究マネジメント室
琉球大学 研究推進機構研究企画室
早稲田大学 研究戦略センター
横浜国立大学 研究推進機構
中央大学 研究推進支援本部
広島大学 未来共創科学研究本部
研究戦略 研究戦略推進部門
東北大学 研究推進・支援機構リサーチ・マネジメントセンター
東京大学 リサーチ・アドミニストレーター推進室
新潟大学 経営戦略本部IR室
神戸大学 学術研究推進機構 学術研究推進室

詳細
<https://u4u.oaic.hokudai.ac.jp/11252/>



お問い合わせ

北海道大学 統合URA本部
(担当：中野)

〒001-0021 札幌市北区北21条西10丁目 北海道大学 創成科学研究棟 5階 05-102号室
TEL: 011-706-9581 E-mail: ura_strategy@oaic.hokudai.ac.jp URL: <https://u4u.oaic.hokudai.ac.jp/>

第 19 回 JINSHA 情報共有会 報告書

「社会的インパクト」を「評価学」の視点から考える

発行日……2025 年 3 月 31 日

発行者……北海道大学 統合 URA 本部

〒001-0021 札幌市北区北 21 条西 10 丁目

<https://u4u.oeic.hokudai.ac.jp>

E-mail : jinshaforum_hokudai@oeic.hokudai.ac.jp

Tel : 011-706-9581



北海道大学
統合URA本部